

桀狩劍本地

近松門左衛門作

リ頃ころは冷泉院れいせんいんの御在位みまゐりの御代みよひ。安和二年あわにふたとしの春はる、主上しゅじやう夜なく御惱みなごあり引サシ有驗あつげんの高僧こうそう貴僧きそうに仰せて。大法だいぽうを修しゆせられければ。も。其そのの驗げん更に無なかりけり。御惱みなごは丑三つばかりにてありけるが。神泉苑しんぜんえんの森のの方のより。黒雲くろぐも一叢いちじゆう立來たてきたつて。御殿みどのの上に覆おほへば。ナホス必かならずオロシシ惱なごえ給たまひけり。地ち則すなはち公卿こうけい詮議せんぎありて定さだめて變化へんげんの所ところ爲なるべし。武士ぶしに仰おほせて警固けいこあるべしとて源平藤橘げんへいとうきつの兵へいを選えらべられ。上總かみのくに之介のすけ平の朝臣あそみ惟茂ただしげをぞ。フシ宿直しゆくぢくに選えらび召よされける。地ち抑おさ此このの惟茂ただしげは桓武天皇げんぶてんかうの後胤のちひら。高望たかもちの親王のちかうに三代のよの末葉のすえ。民部卿みんぶけい兼忠かねただの嫡男ちやくなん生年なまね二十五歳にじふごさい。薄紅うすべに梅うめに若草わがくさ摺すりつたる狩衣かりぎぬ。弓ゆみは重籙おもむす山雄やまゆうの眞羽まはの鎬ほ矢や只一筋ただひとすぢかい込こううだり。地ち郎らう等らうらうの茨あざ孤次こじ郎らう黄糸わうしの腹卷はらまき赤銅せきどう作さくどうの打太刀うちたち。足緒あしぐも

長ながに結び下くだけ。左近さきんの陣のち此方このあたなる。櫻さくらの木蔭のきかげに敷しか皮かわしかせ月つきさへ遅おそき雲井うみの庭の。衛士ゑしの焚たきく火ひの薄煙うすけむり星ほしの光のひかりも臙夜やみよや。時刻じこく待まちつ間の片睡かたねり。フシ騒さわがぬ有様ありさま不敬ぶけいなり。御み格子かき子こ高く明渡あきわたし内侍うちしやく命婦めいふの侍女しやくじよ。上日かみひの上の上達部たつべ几帳きぢやうの物見ものみ簾すだの襖あき。覗のぞきさめき天晴あまはゆゆしき骨柄ほねがらかな。此このの頃ころ召よされし武士ぶしどもが誰たれか是こゝに及およぶべき。如何いかなる變化へんげんも恐れんと聲こゑも。フシほのめく空そら燻物かぶら。地ち炬火たてふし影かげ細こく既に夜半やはんの時とき申し。宮中みやちゆう更さらけて物もの凄せし刻限ときかぎ至いたれば案あんの如ごとく。地ち俄いに風落かぜおち雷光いかづち黒くろ雲渦うみ捲まき震動ゆづりし。すはや御惱みなごと立騒たてさわぐ惟茂ただしげちつとも騒さわがす。雲間うみをきつと睨にらめ付つくれば形かたちは四足よつあしの獸けもの。面おもては飛龍ひりゆうの如ごとくトル三さん焰えんを吹ふいてぞ閃いたり。地ち膝立かみだ直ただし大音おほね上げ。調しらべ從四位じゆうゐの下上のしたうじやう總すべの受領じゆうりやう平へいの朝臣あそみ。

惟茂ただしげと名乗なをつて鳴なびびし。地ち矢取やとつて打番うちばんひよつびよ放はなせば手應ておこして。ひやうはつたとぞ中あたつたる得えたりやおうと矢叫やこゑびの聲こゑ。鞞びん目は御殿みどのの檜皮ひのかわにとまり變化へんげんはをめき苦しんで。落おつる處ところを茨孤次郎あざこじらうむんすと組くんで暫しばらくしが程ほど。捻ひねぢあふ足音あしね。フシ大地おほちも轟とどくばかりなり。地ち茨孤あざこ名なに負まかふ功こうの者もの引擔ひきかいで。どうと投伏なげふせ打物うちもの抜ぬいて。刺通さしとおし切りきりさばかれ首くびは宙そらに舞まり。四足翼よつあしよくも散亂さんらんし虚空こくうに飛とんで失うせければ。御惱みなご平へい癒い忽たちちに風治かぜぢつて晴はる。夜よの。二十日にじふにち餘ありの月清つききよく夜よの明あけたるが如ごとくにて。宮中みやちゆう悦よろこび聲こゑ々に射やたりや惟茂ただしげしたりや茨孤あざこ。古今ここん無雙むさうの弓取ゆみとりやと。フシ勇ゆうみ賑にぎひ給たまひけり。地ち關白せきはく教通きやうつう公御こうみ階かゝに立出たていで惟茂ただしげが弓箭ゆみやんの德とく。叙感じよかん淺あからず將軍かみの官くわんに任まぜらる。汝なんぢは葛原かつらの親王のちかう五代のよの孫まご。先祖せんぞ義茂よしもと將軍かみが武勇ぶゆうの餘慶あまのゆきを繼つぎし故ゆゑ。余あな五將軍ごかみと名乗なをるべしとの宣旨のたまひなるぞと宣のたまへば。惟茂ただしげ左右さうぶの袂たもとを廣ひろげ。烏帽子からぶしを地ちに付つけ拜賀らいがの體てい。シ面目かみめ餘あつて見えに

ける。獨愛に伊豫國の武者所太宰の大貳極諸任。遠侍に宿直せしが會釋もなくつゝと出で。これゝ惟茂御邊將軍軍旨あればとて御受け申すは心得ず。將軍の職といつば。武官の棟梁朝敵を征し。非常を警むるを以て規模とす。變化は當分去つたれどもあれ見よ。暮日の箭矢御殿の楡皮に射付けたり。御殿に箭矢を射つくるは天子に對つて弓引く道理。朝敵のなす業天理を恐れず。弓矢の法も知らぬ愚人武士の司となるべきか。地かゝる御説議もなくふかゝとの將軍軍旨。御政道の暗き事末代の譏。勿體なしと。言上すれば。諸卿の面々けに是はと。理と。フシ眉を。ひそめ在します。獨愛に侍所の預鷹巢の帶刀太郎廣房。瀧口の陣よりつゝと出で。御政道暗しとは舌長なる奏聞。剩へ惟茂弓矢の法を知らぬとは。尤和主に似合うたる難勢。事を知らずば語つて聞かせんよつく聞け。それ弓矢といつば神武不殺の威徳を表し。物に疵付け

殺さねども弦音ばかりにて。化生變化を滅す事。たとへば佛神の札守にて惡魔を攘ふに異らず。悉くも天照大神天鹿兒弓羽矢を以て。惡神を鎮めおはします此の理をさして。神通の箭矢と號し。佛道にては大悲の弓智恵の矢とも悟るなり。凡そ大將たる身の弓は袋劍を箱に納めながら。東南西北の敵を鎮め退くる。一張弓の理に至るを精兵の射手とも。又は文武兩道の。弓取とも是を名づけたり。地見よく今宵の變化惟茂矢先の疵はつかず。只一矢に射て落し郎等に切留させたる。惟茂の心底を察するに射殺すは易けれども。御殿の棟に矢を射付け血を流す恐れを存じ。矢の根はそつと抜棄てたりと覺えたり。地證據にはあの矢を下し見すべしと鞠垣の。棹取りのべてかり落し見れば詞に違ひなく。箭ばかりに鏃はなし惟茂會釋し。ヲ、その矢の根これにあり。惟茂が家の相傳弓矢の故實これ御覽ぜと。箭先の大鷹僕懷中より取出せば。諸

任は一句に返答なく拳を握つて赤面す。地帝を始め月卿雲客帶刀太郎が弓矢の評定。惟茂が振舞優にやさしき勇者どもやとフシ再びあつとぞ感ぜらる。地天氣猶も麗しく關白重ねて勅を蒙り。柳の五ッ衣着たる官女を誘ひ。御劍を携へ出で給ひ。惟茂が振舞仁義の勇者と謂つべし。且つは神道にも携り佛法をも窺ふ事。多能は君子の恥づる所甚だ感じ思召し。此の御太刀は神代より傳はりし平國の御劍とて。八幡宮の御母神功皇后異國退治の寶劍なり。然るに信州戸隠山に惡鬼化生し。民俗を惱す山訴ふる。此の度大内の變化も正しく彼の山の變化の餘類なるべし。此の太刀を帶し戸隠山に驅入つて惡鬼の根を絶ち。國家安全の功を顯し朝家を守護し奉れ。且つ又女には。未だ定る妻なしとや。是こそ中宮の上童世繼御前上より嫁せ下さる。此の御太刀を土産にて吉日選び送らるべし。地如何に猛き武夫も世になびけ梓弓。妹背の中に子をまう

け武勇を子孫に傳へよとの。叡慮なりと宣へば。惟茂は身に餘り冥加にあまる悦を。何と奏せん詞もなく世繼御前は嬉しげに。

見かはず眼許色深き御所の女中の花心。羨むもあり妬むもあり惟茂が矢先には。變化

は物か及びなき内裏上臈しとめしは。けに精兵の手利やと其の名を。舉げし 三重へ九

車や。フシ柳櫻を。こきませて。錦小路の中納言冬通卿の一人姫。玲瓏君は隠れなき

公家一番の美人草。草のゆかりのフシ草結び。彼の惟茂といつの間。つい言傳の架橋

を。渡り初せし文玉韋戀の山々重りて殿御よ妻よの約束を。つきぐくお部屋の人なら

でステエ人に漏さぬ閨の戸や。一條表の物見の亭氣のむすばれも時津風。はれやかに

見渡し給ひ。詞なうく能い日和ではないの。美しい男が空色の薄物着て。にこ

く笑ふやうな景色東山も一目にて。惟茂様の吉田のお館。手に取るやうに見ゆれど

も毎日遠目に見るばかり。地いつ呼迎へて

下さるやら若しお心が變つても。世間忍びの契約なれば恨いうても齒がきかぬ。ア、一人辛氣をやむばかり。四方の霞は晴れた

れど自らか氣ははれぬ。皆は心に苦がなうてフシ羨しいなと宣へば。地小枝の局聞き

もあへず。ア、詞それは案じ過しと申すも仲人なしの。御契約世間へ知れぬと申せ

ばとて。人にこそよれ惟茂様御詞といひ數通のお文。嘘があつてよい物かお大名なり

高家なり。此の度内裏の御手柄余五將軍になり給へば。地關白様かどなたぞ歷々のお

仲人で。表向の言入れのあるは定追付あれに。御祝言の御殿が建つて御夫婦お顔をな

らべて。東山の春秋をお庭に御覽なさる。は今の事。少いそくあそばせ。詞なんと

腰元茶。あの景のよい吉田白川山。春は躑躅や蕨折。秋は栗など拾うたら面白からう

ぢやあるまいか。いや申しお局様。地何よかかより惟茂様の。境内の松茸が見事なけ

な。兎に角に御果報なフシお姫様ぢやと笑

ひける。地姫君もにこくとあれ人々。先から此の築地の前いろくくの。進物持つて行通ふ今日は如何なる祝日ぞ。何事やら

んと宣へば。詞あれも皆惟茂様への進上。内裏の變化を退治あり。將軍の位に隠り給

ふ御祝儀。御一家は申すに及ばず公家武家の持囃し。お出入商人御用聞。職人まで我

もくと進上物。地此の中から引きもきらすといふ處へ。五十ばかりの使者男板目付

けたる出立の。びんと反つたる朱鞘の刀鍋作りの月代に。白髪交りの五體付下人に持

たせし折紙の。御太刀一腰金馬代。四百石は見え渡りフシたしかに武家とぞ知られけ

る。それく其處へ絹上下の撫付男。年頃配も三十一字進上物も歌の臺に。番すゑて

持たせたる。山鳥の尾のしだりをの。長袖なりと見すくも。ハツミ公家業よりの。フ

シお使者ならん。平櫓かたけて來る中間サア。是は武家か公衆方が。地されば櫓が五

升櫓御所方といふ心。公家業であらうが中

間が鐘頭。武家方でもあらうかと目利する間に又其處へ。暮に似た魚五尾。臺に載せたはありや何ぞ。あれは鮠と申す物。五つ並べの進上はお出入の呉服屋と。さいてからは一寸もフシ違ひはせまいと笑はる。地爰に一際目に立つて洲濱形の大鳥臺。松竹に鶴と龜蒔繪の文箱紅の。紐ながく結び上げ。仕丁二人が持舟にオッリさながら祭の荷ひ物。地往來も見返る折柄橘の諸任。郁芳門の番替り油の小路の四辻。馬をはたと乗りかけたり。徒士の者腕を張り。大道一ばい足なんだ。はやく持つて片付かすば踏碎いて捨てべいと。既に手をかけんとす仕丁どもびくともせず。ハテがやくとやかましい道が狭くばのいて通れ。忝くも大内の女中世繼御前より。余五將軍惟茂公への御進物。踏碎かば首から先へ。出して置けとたつた一口にいひ返す。諸任くわつと腹を立てヤイ。ぬらがか。惟茂風聞きたくなし。其の島臺打碎き青才

六めらそれ踏殺せ。地承ると徒士若黨どつと寄れば仕丁ども。無法者を相手にするは癩と棒打。此のお館頼みますと門の内へかき入れ。御進物に疵さへ付かねば面々は言譯立つ。犬死すなサア来いくと。フシ一散かけて逃けてけり。地よしよし云がひなき下司めら構ふなく。惟茂が面を踏む同然門内へ込入つて。鳥臺を踏碎け。踏拉けやと下知をなし亂入らんとする處に。地大紋に烏帽子かけ大の男門一ばいにつゝ立つて。寄付く者を引つつかみく。弓手馬手へ取つて投げ。諸任が乗つたる馬の鞅つかんでゑい。くくと二三間尻るにどうと捻付け。ヤイ。見ん事馬に乗つたれば定めて武士の切端ならん。眼が見えぬか法式を存せぬか。錦の小路の中納言殿のお館。推參斯くいふは御家の稚掌金剛兵衛利綱。推參至極な御門に馬を乗りかけ下人輩に踏立させ。ぬつくりと懐手で見て居ようと思ふか。サア下馬せうかせまいか。但し引きすり下さうかと手ぐすね引いてせめつくる。ヤア公家待め。太宰の大貳橘の諸任を見知らぬか。禁中の寶劍平國の御太刀を拜領せんと。度々奏聞せし我が願ひかなはず剩へ。心をかけし世繼御前まで惟茂に下され遺恨深き惟茂が進物に。道を塞がれ息口させ。此の門内へ昇入れしを堪忍する諸任ならず。是へ出して踏碎かせい。否といは公家でも御所でも乗込んで。屋臺共に馬足にかけ微塵にするがサアなんと。ハア、事をかし。馬の足に懸替あらば一寸でも乗入つて見よ。地ヲ、所望ならば是見よと乗込む馬の前臑。兩手に取つてこりやくく目より高く差上ぐれば。馬はさんたをする如く諸任は仰向に。轉を打つて跳返し眞逆様にぞ落ちたりけり。地顔を擧めて。阿呆力の公家侍。何を喰ひ込んだやら喰ひ倒れ地覺えて居れと。砂打ちふるひ腹をさすつて立歸る。跡からちがくちんば馬ッ見苦しかりける有様なり。地利綱どつと打

笑ひ。御内の者ども此の鳥臺、惟茂卿まで
届け申せといふ處へ。姫君怒れる顔に、
待ちや〜利綱。世繼とやらいふ女惟茂
様を。我が物顔にほてくろしい此の長文。
何程逢萊の鳥臺で祝うても。地相生と契り
おいたは此の玲瓏。鶴龜も引きむしつて松
竹も折つて棄ちや。追出されうが殺されう
がお館へかけ込んで。一足なりと自ら先へ
嫁入して見せうと、断出で給ふを抱留めて
これ姫君。跡先何にも存せねども此の體
で断込んで。氣違の沙汰に落ちお家の
お名身の恥。理が非になると制すれども。
地いや大事な夫ゆるゑの氣違は女の上に恥
ならず。生を替へても添はねば置かぬ愛を
放せ利綱。やつてくれぬか利綱とエテ聲を
上げ玉泣き給ふ。地金剛兵衛もてあつかひ。
地お局はお側に居てかゝる大事を知らぬか
と。地脱め付けられて頼ひ〜。元ひよ
つとした御縁にてお文の通路度重り。惟茂
様も惟茂様來世かけて夫婦の。やがて呼迎

ようのと神かけたお文。握つて御座るお姫
様。世繼御前は勅諭にて御劍を土産に。明
日の晩嫁入との文を見て。地お腹の立つも
お道理というてあらは勅諭なり。足らは
ぬ女子の料簡どうした物であらうやら。フ
シ胸が痛いといひければ。地金剛兵衛横手を
打ちさて〜始めて承る。惟茂ほどの弓
取直筆の契約は。仲人より猶慥な事。中納
言の姫君を傾城遊女の如く。よも一時の戲
れにはせられまじ。たとへ帝より世繼御前
を賜はるとも錦小路が娘。玲瓏姫と堅き契
り候と奏聞すること道ならぬ。長袖と思ひ
侮つたる仕方。此の利綱があるからはお家
に暇はつけまじき。地サア御祝言は明晩半
時なりとも此の方の。お輿を先へ入れ申さ
ん然れば姫君御本望。此の上に惟茂卿お心
變るか變らぬは。脇からは見えぬ事それは
御夫婦しつぽりと。お寝間の勝負に遊ばせ
と笑へば姫君浮立つばかり。エ、忝ない。
利綱様々様々おや。地父上へも母上へもよ
いやうに申してたも。阿ツアさりながら
盃事の最中に。世繼御前が來たらばどうし
たものであらうの。ハテ何の事はない。赤
前垂を引つ張らせ。はしり元で味噌すらせ。
釜の下焚せたり世繼の名をかへ豪處の。飯
糰御前にしてくれんと戯れ。用意を三重へ
俄事。フシ既に其の夜は。地如月卜旬花
の三月よけぬれば。皆吉日ぞ其の外に忘む
は申の日猿の頼。おして嫁入の御乗物御輿
添には金剛兵衛。鶴龜書いたる對の提灯供
侍が子持筋。追付け初子を御懷妊。フシ大原
口にぞ着きにける。地金剛兵衛立留りなう
侍衆。調つく〜思案をめぐらすにお輿を
どつと持ちかけ。若し違亂ありては姫君の
御身の上いかゞなり某は二三町先へ参り事
の様をはからはん。地お乗物に氣を付けら
れよと言捨てて只一人。先に立ちてぞ急ぎ
ける。地はや法性寺の四ツの鐘早潮に響く
加茂川の。堤の陰より頼被の男二人。出づ
ると見えしが提灯持をはたと蹴倒し。提灯

微塵に踏碎けば常闇とこそなつたりけれ。

供人は是と騒ぐ處に。此處彼處より數十人

が足音して星に映らふ拔身の光太刀を渡せ

くといふ聲ばかり。姿は見えず盲目打に

切りまくれば。六尺中間青侍、臍を薙れ腕

を落され。南無三眉間してやられ胴骨腰骨

小鬘先。あいたく痛手眞はぬ者もなく泣

いつ喚いつ逃けて行く。姫君は乗物に生き

たる心地もなき悲しみの。聲をしるべには

せ集り太刀こそは取らずとも。世繼御前は

是なるわと。乗物手ん手に追取巻き、行

方知らず落せけり。地金剛兵衛は五六町

行過ぎ見れば提灯消えて。人聲遙に騒動す

あら心得ず氣遣はしと。息を限り足限り走

つて歸る夜の道。何かは知らず踏み滑り眞

仰向にどうと伏す。南無三寶と起き直れば

身もひつたり。土も石も濡れくと手に觸

るあたゝまり、是はさて。聞だつた今切つ

るを引揃みすかして見れば。御家の提灯の

斷切れハア、姫君を奪はれた。調エ、利綱

が一生の不覺。おのれ何國迄と駈出でしが

ハッ。我は狂氣したさうな方角の辨へなく。

どこを前途に行く事ぞ。先づ何者の所爲な

らん。ム、知れた世繼御前が妬の所爲。イ

ヤ諸任めが昨日の遺恨かと。地思案する程

氣も混亂分別入らぬ思案もない。京中九萬

八千軒。一軒づつ捜せばとて取返やさで置

くべきかと。北へ走れば御手洗川の川音の。

しんくとしてあてもなく東はたつた今來

た道。先づ洛中をと駈出す足許暗く加茂川

の。深みにだんぶと浸つたり。エ、しなし

たりとかけ上り裾に茅のたるみなく。心ば

かりはせきのほり行くも走るも同じ道。二

三町の間を往つ、戻つ、くるくと。さし

もの利綱途方にくれ。物の魅入が誑されし

かと齒齧をなしてどうと坐し。エ、調口惜

地かくては主君の言譯なしまだく、面を曝

さんより。自害せんと膝立直し向ふをきつ

と見渡せば。ヤア、調下り松の松蔭に提灯ち

らめき。人足數多乗物もほの見ゆる。サア

地あれに極つた。一寸もやらうかと目差すも

知らず暗き夜に。道も晶も別ちなくもみに

もうでぞ。三重へ追つかくる。地世繼御前は

大内より直に嫁入の行列。中にも御太刀の

役人は功の武士を選ばれ。則ち鷹巢の帶刀

太郎廣房。折烏帽子に袖單衣ついたる直垂。

肌には腹巻小袴にひをぐくりして。平國の

御太刀錦の袋に入れながら。目八分に差上

け乗物に引添うて。夜道は大事とくまなく

に、ッ眼を配つて歩みけり。地其の外介添

衣かづき長刀傘。さんざめいたる供先走り

か、つて金剛兵衛。やにはに提灯切落し無

二無三に切りまくる。思ひがけなき帶刀太

郎わつとばかりに太刀ひん抱へ。此處に隠

中間小者乗物すて、フシ皆散々に落失せけり。

世繼御前は聲を上げ。是はそも何事ぞ何者の所爲ぞや。スエテ助けてくれよと泣き給ふ。地走り寄つてテ、お道理お道理。

某があるからは恐い事はない。地あれ月魂も上つたり惟茂卿へも程近し。乗物の一挺などは引つかたけても參らうが。先づお心を鎮められいざそろ／＼お徒歩でと。乗物の戸を明くれば。ア、怖。其方は見知らぬ何者ぢやと二度喫驚に魂消え。利綱も横手を打ちこりや違うた。エ、聞せくまい／＼と思へどもせいたさうな。口惜しやと我が身ながらも。身に狼狽へ。地呆れて空を見る顔も。二十三夜の真夜中の、フシ月もきよろりと出でにけり。地かゝる處に匹夫ども十人ばかり乗物か、せ馳來り。あれこそ金剛兵衛利綱。ヤイ、調狼狽者。主の娘は此の乗物此の方に入用なし。世繼御前と平國の御太刀所望故。取違へてこつちも鹿相そつちも鹿相。地太刀の行方は追つての沙

汰まづ此の乗物と。替へ／＼すれば兩方よしの兩得渡せ／＼とわめきける。調利綱大きに勇み出でやれ／＼よう来たなあ。此の金剛兵衛を背からよううろたへさせ。既に自害をせんとした。姫君に憂き目を見せ。此の上臈に狼藉したもおのれ等故。返報せずには置かうか。前に立つたは太宰の大貳が郎等。兒玉の忠太と目利した。替へ／＼とはあた／＼かな。地金銀の兩替も利を取られねば兩替せぬ。豆板の兒玉首つりを取つて替へんすとくわつと見出す兩眼は。新鑄の白銀を研ぎ。出せる如くなり。ヤア、調兩替に小言吐かば姫が胸骨打折つて。疵物をつかませよと引出さんとする所を。地元首つかん

でぬつと指上げ目の軽いわる銀。潰しにせんといふまゝに石にかつはと打付くれば。頭ひしけて失せにけり。地いで残るやつばらに極印打つてとらせんと。するりと抜いて三人同じ枕に切倒せば。四方へばつと

見せず。三重へ逃け失せけり。地立歸つて乗物引寄せ死骸の上帯切りほどき／＼。棒と棒とを確としてめて結合せ。引上げればテ、天秤針口軽目なし。此方も重い彼方も重い主君の戀の重荷に小付。見捨てぬ義理は侍の肩入れ奉公。えいやつと荷うて宿所に立歸る。ツ、四人の肩を一人して六尺。六尺又六尺。二條川原は石高くだつくりほつくり曲り道。車大路の廻り道今出河原鞍馬口。思沙門天も御納受百足の足取足づかひ。引足五尺、伸足五尺、一條大路柳原。柳がゆるぐ春の風乗物ゆらすなゆるがすな。雲も霞もはいはいは、ハ、ハ、ハ、はや東雲の朝鳥。雀はちう／＼忠臣の誠を。力に現せり。

第二

地范蠡西施を湖水に沈め。吳起が妻を害せしも勇者の道を重んずべき道とかや。地今度橘の諸任狼藉に及びし刻。平國の御太刀紛失の事。永く平の御名折と。洛中の口ずさみ止む事なく惟茂卿の御館には。老中

地本劍狩精

337

譜代の御家人等氣を失ひ色を損じ。日々夜々に寄り集り。フシ詮議とりくまらまちなり。地茨菰次郎肩を擧め。誠の主君惟茂大内の變化を平け。弓箭の徳によつて御惱平癒の恩賞として。世繼御前を宿の妻になし下され。剩へ天下の重寶平國の御太刀まで。當家に下し賜はる事。地弓矢の譽時こそと御婚禮の口限も。急に急ぎ待ち設けしかひもなく。思ひがけなき路次の騷動彼の御太刀も行方なく。世繼御前も身の上危かりしかど。金剛兵衛とやらんが働きにて恙なく。地則ち彼が館に忍びおはする由さりととは案に相違の事。世間の人口且はお家の一大事。此の上は草を分けても。二度御太刀を捜し出す手段こそあらまほし。座中の面々心底を殘さず評議あつて然るべしと。いはせも果てす若侍口々に。いやは只外を求むるにも及ばず。必定橋の諸任我が君に將軍を超えられ。偏執の上多年所望の御太刀。當家に渡り無念とは思へども。

地腕敵はねば一戦までに及ばず。御祝言の供先にて狼藉仕懸けどやくや粉れに御太刀も。盜取りたるに疑なし。何條事かあらん彼奴が館に押寄せ。門も塀も踏破つて込入り御太刀詮議するばかり。若し手向ひせば太刀の鐵の續かん程滅多切りの一軍。續けや人々ヲ、面白し尤と。一度にはらりと座を立てば。茨菰大手を廣げ。調あ、粗忽なり方々暫し暫しと押留め。橋の諸任が所爲と世上の噂。何れもの料簡さる事ながら。世繼御前の御輿には鷹巢の帶刀太郎。禁中守護の武士多き中に二人に選ばれたる勇者。御太刀を預つて引添うたれば。諸任が切つてかゝればとて漫におめく渡すべきやうなし。しかも彼の帶刀其の夜より行方なく。今にありか知れざるとは爰に不審の面々。諸任が多勢に圍まれ御太刀を奪はれたるや一つ。まつた此の騷動をかこつけ。帶刀が欲心きざし。御太刀を盗み逐電したるや一つ。有無の兩儀知れざる中に一戦に及ばん事。地禁裏の聞え然るべからず。涯分まつ鷹巢めを尋ね出し首を踏へて白狀させんに。御太刀の所在知れぬ事やあるべき。構へてせくまいくと。勇む諸武士を押止め悠々と坐したるは。さすが茨菰知行高。フシ家老の思案ぞ格別なる。地かゝる處へ沼田の七郎御白洲に畏り。調扱も錦小路の中納言殿より御使者として。執權金剛兵衛の妹。梅の井と申す女中君に直の見參か。さなくば御家老茨菰次郎殿に。直談との儀に候とぞ申しける。茨菰暫く思案し。中納言家の御使者ならば人もこそあれ生若き女を使者とは。地ム、ウよしよし。某直に對面せん。其の使者是へと座を更め。オクリ衣紋。繕ひ待宵や。フシ十六夜過の。二十日頃。厩にたまる愛敬は。花の粧ひ細そりすうはり柳の間の。フシ廊下傳ひ。人中おめぬすり足は。梅の流し枝梅の井と。選ばれしもけに。理なり。茨菰立合ひ。調黄門公の御使者梅の井殿とは御自分の儀候な。拙者は

即ち茨菰次郎口上の趣。委細仰聞けらるべしと。地さも慇懃に兩手をつき。卷舌の挨拶に梅の井くつくと失笑し。詞ハアさう堅い御挨拶ではどうも御口上も申されず。尤も堅い御使者ならば澁面つくつた侍衆も多けれど。此の梅の井が参るからは中納言様とは詞の品。誠は姫君玲瓏様より使と申せば使。お恨みの品々おゆかしがりも第一。お咄も申せとて腰元衆も多き中に。梅の井参れ。あいと申して参りしからは。畢竟姫君の心をくんでの思はく咄し。お前もサア。其の三ツ指割膝取りおいて。お姫様と惟茂様の太鼓持ちやと思召せ。堅い顔遊ばしても。地色好みの惟茂様に使はるゝお人ぢやもの。その髻のかゝりが助平の。べいの字なりに見えますと。フシとんと叩いて寄添へば。さすがの茨菰挨拶なく。軍書の評判聞きたる外。耳なれぬ咄し。フシまじめになるこそ可笑けれ。詞梅の井重ねて。地體帝様が帝様。變化退治の御褒美なら。大國

小國馬物具で好い事を。世繼御前とは異なる物。よしは宣旨にもせよ惟茂様御心底さへ變らば。玲瓏姫と申して契約の妻ありと。たつて御酌酌なされる。に。いかな玉様も押付け所爲はなさらぬ筈。根が移氣な惟茂様跡先知らずほかくと。あたはれして畏つたとお請合。案じても御覽なされ。地男一人に女房二人そもや忤一本に曰つて。いかな惟茂も搦くには少ししんどりに御座んしよ。此の度路次の騒動も玲瓏姫様の乗物を。世繼御前と心得悪人どもが引つ肩けて走るやら。妾が兄の利綱も氣のせくま、に取違へて。世繼様の供先で粗忽の働き。一方ならぬ大搦。事の起りは皆惟茂様の不心中ゆゑ。詞されども兄の金剛兵衛。地難なく世繼様も奪ひ返し。お二方とも私が屋敷に忍ばせ置き参らせしが。ア、詞さすがは上つ方案じたとは違うて。其の睦じさ中のよさ。地琴の連弾續松の歌骨牌も逢坂山のさねかづら。悪い處へ氣を廻してお二人の

こそぐり合ひ。腰元衆のもらひ笑ひ。脇から見ての見事さ。詞どうともかうともいはねど。悟氣妬は女の役。底意にどうした無分別もと油断ならず。地刺刀缺もお側に置かぬ私等兄弟が氣配り。生物二足頂つてかういふ内も氣遣絶えず。もし何れにてもお身の上に過ちあつては金剛兵衛は切腹。第一はお家の暇。玲瓏様の仰せを受けて此の鬱憤いひに來た梅の井。恐らく戀の道の孫子吳子。軍配振つて勝負を付けねば歸らぬ。世繼御前も宣言なれば嫁入せねばきかぬ氣。玲瓏様も契約なればいきりきつて嫁入する氣。お二人の上臍を何かなしに。此のお館へ迎取つて其の上で埒を明けさんせ。これ御家老此の通りお取次。地きりくお返事くときし付くやうにせかまれ。詞茨菰次郎頭を掻きさりとは一せ一期の迷惑第一我等弓矢打物取つては。誰に負けんと存せねども色事かつふつ不得手なり。地何れにても若手の武士にお頼みなされ。あい

た〜。あいたしこ〜。又例の痴氣。温石あぶつて来る間。暫くそれにと僞つて。走り入らんとする處を。どつこいやらぬと袴に縋り。脚エ、手の悪い御家老様。色事不得手といふ下から嘘つく術は知てぢやの。

地餘の取次で濟む事なら。あつたら口に風ひかせてこなさまに頼まぬ。否でも應でもお取次一人悪くば二人連。手を引合うて出たら女夫ぢやといはうぞへ。調いうたら大事か。地私も定まる男はなし浮名が立たばそれ限りサア。御座んせと手を取つて引摺れば。エ、舌たるい何のまね。髭口反らしてどうさんせかうさんせと。ひらたくた

ツと飛退いてフシ赤面。したるばかりなり。惟茂につこと笑はせ給ひ。ヲ、詞最前よりのあまし聞いたるぞ。物堅き茨菰が取次しかぬるも理。お身は金剛兵衛が妹梅の井とや。地兄利綱が働きにて世繼が身の上

悪なく。玲瓏もろともかくまひ置きたる由過分々々。我も飛立つ玲瓏姫ゆかしさ限りあらねども。平國の御太刀紛失したる事いかゞと詮議の最中。地世間のとなへを憚り文を以ても音づれず。女心に恨みとはさこそ〜。兩人ともに惟茂見放し捨てんフシやうはなし。追付け玲瓏世繼御前諸共我が方に迎取り。兄弟が苦を晴さん。サア〜歸つて二人の姫にかくと告げ。此の文見せて悦ばせと手づから結ぶ御文箱。眞紅の糸の末永き。妹背のしるしとフシたひければ。梅の井悦び二つの文箱押戴き〜。又大將の御料簡は格別ぢや。地此の文見せたら飛付いて。玲瓏様の玉の緒も消ゆるばかりのお嬉しがり。お笑ひ顔見るやうなは

やお暇と御文箱。兩手に重き妹春山。歩むは軽きちよ〜。走りオクリ宿所をさしてぞ歸りける。地茨菰次郎跡見送りエ、出過ぎたる女めかな。これ我が君。あの女郎が辯舌に廻され。御一生の浮沈たる御太刀の詮議は脇になし。一人ばかりか二人の姫君迎入れんなんとは。先づ此の次郎めは呑みこまず。屹度御心腹承らんといへば。惟茂卿あたりを見廻し。次には誰も居らぬか。小姓どもなど聞いては居ぬか。れ〜と膝許に招き。女の恨妬には身を忘れ。恥を思はぬ慎み。太夫に二人の妻。少しも心にかゝらぬ事。されども御太刀詮議の最中。梅の井とやらん先づすかし歸さん爲。迎取らんと口上には僞つて。二通の文は同じ文章に認めたり。語る如く。彼の御太刀行廻つて若し諸任め

が手に渡り。戸隠山の悪鬼退治。諸任に先を越されては一人の恥辱のみにあらず。地子々孫々永く當家の瑕瑾ならずや。さるに

よつて我ひそかに館を忍出で、日本國中浦々島々海は櫓權の立たんす程。陸地は足を限りに尋ね求め御太刀無きに極らば。一人戸隠山に分入り悪鬼の腹中に葬らるゝか。首取つて立歸るか今日や思ひ立たん。明日や思ひ立つべきと日を數へて闇然たり。今日只今發足せん。世上は惟茂所勞と披露し。留守を守つて帝都の守護。怠る事なかれと御説あれば横手を打ち。調豫々左様の仰せなれば斯う申す茨菰もお供とこそ存ぜしに。腰拔役の御留守思ひも寄らずとかぶり振つてぞ申しける。地いやさないひそ茨菰。主従都を出でしと聞かば大悪無道の諸任。如何なる事かを仕出し朝家の御爲家の爲。後悔あらんは必定なり。汝が家に残るこそ惟茂が身二つあるも同じなれと。主従心隔てなく親の深き詞の花。築山の細道を裏門よりと出で給へば。茨菰次郎も力なく跡に止まり御後。見送れば見返つて主従互の御名残。盡きせぬ月の都の空中に。隔て、三

別れ路と。キンシ神ならぬ身は。白玉か。ステセめて何ぞと我が涙。地間ふ人もなき獨寐の憂身もつらく世もつらき。世繼御前玲瓏姫。男ほしいもゆかしいも。同じ思ひの同じ身を。同じ住み家に睦ましく。御歌合草結。悪性咄。フシとりふに。亂れし髪を二面の鏡小ナリ向ふへ粧ひ誰が爲につくらふ影ぞ仇人に。かくとも告げよ。フシ楊の櫛。腰元二人が梳く髮に。四邊も薫る梅かをる庭の東風芬々とフシ心ときめく御住居。地かゝる所へ梅の井惟茂卿の門外より。走るやら轉るやら息を切つて歸りしが。長廊下をぐわたくく障子びつしやり明けるや否や。間サア戻つたくく私一代の智慧袋。富樓那もどきの上唇咽のかがかね舌の釣緒。頭の落つる程。こつちからも饒舌るあつちからもしやべる。さうしてかうしてどうしてと。遣羽子の詰開きかき集めた咄もあり。ヤア息がきれる水一つと。地跡先いはずまんなかへフシべつた

りと坐るにぞ。世繼御前玲瓏姫兩方より立ちかゝりコレ梅の井。お屋形の首尾氣遣ひな。地惟茂様にお目にかゝつてか。軋ませずと咄しや。早う聞きたいく。サアくどうぞとゆすり立てられ。梅の井吐息ほつとつき。エ、調餘りびろく遊ばすな。聞くまいとあつても是がいはいで濟むものか。まあとんと主様に直に逢うたと思はんせ。そして恨の山々お二人になり代つて。たくしかけく離なくこちの利潤にして。地追付け迎ひの乗物お二人ながらお屋形へ。迎取つて抱いて寢て可愛がろとのお返事。別してあなたの御念が入つて。拵へは何も入らぬお手道具より櫛笥より。三百目入の地黄箱五六千も用意なされとの御口上。お二人様へのお文箱。フシ渡しますると差出す。地二人の姫君飛立つばかり。忝いと嬉しいと餘りの事に手もふるひ。夢ではないか玲瓏様。詞まアお前から御覽なされませ。ハアテ辭儀のない事そもじさまから讀ましや

んせ。地そんならいつそ一時にと。文箱ふみばこあくるも戀人に大高の結びむすび文。参る身よりの御すさみ聞く間違しと繰返し。讀返し巻返し見れども迎ひの輿とはなく。御太刀尋ね出さん爲館かたがたをも忍び出で。野山の起臥し此の世の逢瀬あふせ定めなし。死せば未來とばかりにて玲瓏れいろう姫の文章も。世繼御前の御おんすさみも同じつらさの筆の跡。はつとばかりに胸塞り。フッさしうつ。むいて在おします。圓梅

の井呆れた顔付にてこれ姫様方。おとき様の痴話ちわがな文お二人ながら眺ながつゝはねつ。お悦びであらうと競まひかゝつて戻つたに。さつても當あたの違ちがうた彼のすねくろしいお顔わい。世繼様なんと玲瓏様こりやどうぞ。エエ氣がかりなわけも聞かせず。地お意地の悪い中から私が讀んで見て。判斷なさうと御文箱おんふみばこ取らんとするを玲瓏姫つきのけ。詞エ、なんぢやの。我が機嫌のよいまゝにざはざはざはく／＼霪かししい見たうない。地おきやいのとひんと振つたる顔ばせに。

梅の井猶も合點あつてんのかず。詞こりやまあどういふせんさく一切わしは呑込のまぬ。世繼様けなお子ぢや。お文の通りありやうに讀みなりと咄はなしなりと落ちつかして下さんせ。エ、爰こゝなお子もしぶといきり／＼言はんせどうぞいのと。地せゝくり寄りて問ひかく

る。世繼御前は文の表あら包かます明あきば惟茂様。御家おんいへ出ありしと口々に世間へ知れてはお家の御大事。我が身の大事も此の時とそらさぬ振にて。詞ア、別してもない事を。何がそれ程聞きたい追付け迎に乗物やる。地それ迄はまめで居て随分器量上げておきや。女め夫もく／＼二世三世いとしいぞ可愛ぞと。したゝるい御文章我が身でさへ恥かし

梅の井が首筋取つて引退け世繼御前の膝許へどつかと居直り。詞フッ／＼今のは聞き處。女夫もく／＼二世世愛しいかあいと書いてあるが定ぢやの。ア、くだ何の嘘いふものぞ。そもじ様の文章にはどう書て御座んすと。問はれて玲瓏赤面し。地文の通り

あらはさば見捨てられしと腰元どもに笑はれては恥辱ぞと。心に染まぬけら／＼笑ひ。詞イヤ／＼二世三世とは世間並で淺い事。私が文には五世六世彌勒みらくの出申も變らぬ女夫。身み節せつがなえていとしいと。それは／＼忝はじうまい事ぢやとせかすにぞ。地世繼御前も急いそぎのほる格氣くわきの煙けむに氣きを上げて。エエ我が方へは他國するの太刀尋ぬるのと偽りごと。頼まれぬ男心いづその事破れかふれと玲瓏の。胸むねづくししつかと取りななに身節せつがなえるほど可愛いとの文章か。ヲ、面白し／＼身節せつが矮たうがしびれうが。詞惟茂様には此の世繼御前といふおか様があるぞや。忝はじくも媒な人は常とこ様繪え言ごんは汗あせの如し。地

出でて二度歸らねば未來かけての我が夫

を。横取りせうとは暖かな。手柄になるな

ら添うて見やサア。添やらぬかと聲もわな

／＼、フシ身を顫はして責めかくれば、地玲

瓏も云負けじとおんでもない事添うて見し

よ。調繪言ごかしておいても、地帝の仰

せの汗よりも此方の汗はしめ合うて互の肌

の汗雲。吸うても見る事なるまい。此の道

ばかりは權づくに押せど押されぬ茨の枝。

名付ばかりの若草の下紐一夜ときもせて、

肌の味知り抜いた此の玲瓏をさしおき夫

婦とはどの口で。地結ぶの神も御照覽。日

月地に落ち駒に角生え鼠が猫を食殺す。浮

世になつたら知らぬ事。命の内は姫御前の

一分立てて立てぬいて。世間廣う添うて見

しよ。ア、あの口わい云ひそまない顔付

して。ほんにつべこべ／＼とよい加減で止

みやらぬと、はしやいだちよほ／＼口抓つ

て抓つて振り上げて置くぞや。イヤ舌長し

胸紐から母様にさへ抓られぬ大事の身。地

言ひ勝つても。世繼御前は帝から。物説

御前が朝夕に紅白粉のとき研き、粧ひつく

其方が疑せうとは我が身抓つて人の痛さ。

思ひ知れと飛びかゝり世繼御前の肩先ほつ

かりと噛み付けばア、イタもう堪忍せぬ腹

立や口惜しやと涙貫く玉揃寄。地傍にあり

しを幸ひと釵。笄油壺。打付くるやら踏

みわるやら。イヤやうたい更になかりけり。

地梅の井を始め腰元下婢。驚き騒ぎ真中へ

分け入つて。調これはまあはしたない。摺

み付くの殿くのと下々の怪氣事。上つ方

のあるまい事玲瓏様からお諍まり。世繼様

御堪忍腰元仲間へ此の喧嘩。地貰ひました

と背中を擦りすかしてもたらしても。いや

／＼けもない堪忍せぬ。放して存分いはし

やいのと。泣叫びのびより飛出で／＼し給

へども。腰元四方に取圍み無理無體に兩手

をとりオクリ引連れ、奥にぞ入りにける。ッ

玲瓏姫は。只一人跡に残つて立ちつ居つ。

疊にかつばと身を投伏しスエテわつと叫びお

はせしが。地エ、はかなの女の身や口先で

言ひ勝つても。世繼御前は帝から。物説

御前が朝夕に紅白粉のとき研き、粧ひつく

御前が朝夕に紅白粉のとき研き、粧ひつく

の夫婦こちの契りは内証事。どうこけても

世繼めが大事の男を我が物顔。兎角先を超

されぬ先お館へ駆込んで。惟茂様にひつた

りとしがみついで居ましょ。ム、よい思案

と堀がいどり駆出でては駆戻り。ア、是で

も世繼が此の世にあれば戀の仇。妬ましや

面憎やと。すつくと立ちつどうと居つスエ

歯がみ齒たゝきがた／＼。地今の間に

世繼めが死ねがな／＼天も落ちよ地も裂け

よ。山も崩れて落ちかゝり世繼が五體碎け

よかし。憎し／＼のフシ亂れ髪。地髪ほど

けて千早振愷氣の神はなき世かの。庭の植

込松杉も神木と觀念し。願志の鐵釘心の鐵

錠打殺したや殺したや。地櫛笄見れども双

物はなし。エ、何とせん。是よ／＼。地の

鏡思ひ付きたりあら嬉し。地鏡は女の魂

武士の太刀刀。本望逢けん銘の物。得たり

や嬉しと走り寄れば柳の髪も我が涙も共に。

はらくは／＼／＼腹立や此の鏡。世繼

御前が朝夕に紅白粉のとき研き、粧ひつく

御前が朝夕に紅白粉のとき研き、粧ひつく

つて主のある男を寝取る第一の憎い奴は此の鏡。見るも恨みの増鏡と踏付け。く取つて投げ。地是は又我が姿見曇らぬものをフシ鏡山。心ぞかすむ格氣の雲霧誰が研立てん水銀の。水漏らさじと誓ひてし地鏡を仇に捨てられし。此の恨は生々世々盡きせぬものと怒れば怒り。笑へば笑ふ正直の姿の鏡圓くとも戀慕の角稜忽ちに。剣となして我が念力思ひ晴さで置くべきかと。小脇に掻込み躍出で築山の岩角に。押當て、は押戻し。戀と妬みと浮世のつらさ三つの合砥。曠恚の荒砥。生れて馴れぬ力聲庭も春風ど

うくく。共にゑいくくさらくくさつと散るは櫻か。フシ越路の雪。地顔は上氣の高尾山紅葉袋に置く露や。五つの指の何時の間に。枝珊瑚珠に異ならず。寐交や付きしと透し見れば。調ア、嬉し切及も付いたり干將莫耶が名作も是には過ぎじと押戴き。地奥をめがけて駆出でしがいや待て暫し大事の敵。一撃に切るや切れずやためして見んと走り寄り。二抱餘りの古木の梅。下へ振つたる一枝は世繼が腕と心にこめ。えいやつと打てば過たす。枝は中よりすつぱと切れ。念力岩を徹すなるフシ紅梅血汐と亂れたり。調ヲ、天晴切れ物切入らん。地いやく此の氣色を悟られ仕損じては無念なり。だまし切にと上がへ下がへ押し繕ひ髪撫付けんと鏡に對へばア、怖。調こりや何ぢや。藪の後の松の木に六尺ゆたかの大男。地内を見込んで狙ふ體ありくと映つたり。玲瓏きつと心付き。南天林の木蔭よりすり忍び込む。晝中によもや盗人でも有るまい。扱は世繼めが此の玲瓏を返り討に殺さん爲。頼めばとて頼まる、蟬同然の下々。待て見よ目に物見せんとフシ猶も木蔭に身を忍ぶ。地斯くとも知らず兩人叫いてはうなづき合ひ。奥を目がけて行く所を玲瓏鏡押取りのべ。走り懸つて切付くれれば。さしつたりと振返り。兩方より切りかくる刀の返答せず。腰より鼻笛取出し吹かんとする

をひつたくり。詞ヤア扱は合圖の笛か好い物くれた忝い。鼻笛の返禮は咽笛に受取れと。地引起して逆手に取り息のつがひ胸板を。つゞけ様に七つ八つ、ッ突かれて敢なく死してけり。地合圖の笛の隠し勢取巻れは事やかましし。打散して埒明けんと垣に向つて笛取直し。高音を吹いて吹きそらす諸任すはや仕濟したり。時分はよしと十人許り打連れてどつと入る。思の外に金剛兵衛が力士立はつとばかりに怪轉して進み兼ねて扣へしが。詞エ、口惜しくも仕損ぜし。地某は無體に込入り世繼御前を奪取らん。金剛兵衛を討取れと云捨て奥に飛んで入らんとする所へ。茨菰次郎ぬか〜と出で諸任が胸から取つて突きかけ。詞ヤア珍しい諸任。世繼御前は勅詔によつて主人惟茂の妻ちやく〜と存ぜしに。扱は御邊のおか様か。めでたい〜祝うて水を參らせんと。五尺ばかり堀入れたる小山の如き手水鉢軽々と差上ぐる。金剛兵衛聲をかけ暫く

第三

候茨菰殿。水祝より先づ御祝言の夜の石の祝ひ。地我から先と云ふより早く。八尺餘りの立石ゑいといつてすつと上げサア。水からか石からか但し水石一時かと。追廻し追捲り聲を合せて投付ければ。先に進みし十餘人、ッ微塵に成つてぞ失せにける。地さすがの諸任氣を失ひ女房入らぬ女房も去る。こつちも去るさりととは許せと逃げて行く。餘さじものと金剛兵衛追つかげ出づれば茨菰押へ。茨菰駆くれば利綱押へ此方に怪我の無い上は。詞先づ何事も穩便々々茶瓶茶碗の割物かけ物。一所に置くはあぶなもの。地世繼御前は主君の館。こちの姫は此方の御殿惟茂歸洛遊ばして。嫁入の前は仕合次第御寝間のやりくり御機轉次第。上十五日の長枕下十五日のお手枕。談合次第と二人の姫を二人が背中にしつかと逢瀬のそれ迄はおさらば。さらば〜腰元下婢も目を配れ。道の用心敵の推參踏立て。〜踏散す。落花狼藉許すな許さじ。ヲ、〜

〜負うたは木男松の木樫木。負はれし花は梅櫻。盛を。待ちてぞ別れける。

地歸去來とて故郷へ遁れしは。彼の天命を樂みて祿を捨てたる古人の心。應巢帶刀太郎廣房は。去んぬる世繼御前の婚禮に武士一人に選ばれ。御劍の役を蒙りながら太刀風に恐れ。一番に逃失せて。御太刀共に行方なく洛中の物笑ひ。毎日押紙貼札して狂歌狂句の惡口に。落書をたつる門柱。殊に逆鱗甚しく。地事落居の間妻子閉門。屋敷の口々釘付にして扉に樫の大丸太。十文字に遣連へ大釘。裏か、せ。引つそぎ付にて高垣付け。亂杭打つたる世の掟。見る目もいぶせく忌々し。地悼はしや北の方籠中の鳥の憂き思ひ。一子房若の手を引いて門の蔭にて窺へば。往來の貴賤立集ひ。これ〜此の屋敷が腰拔侍。應巢帶刀太郎閉門の態見苦しい。あの落書見よ〜と指さし嘲り讀む歌に。恥知らずいづくで武

士を帶刀が、頼の皮剥け平國の太刀。地出
來たくよい口にやりをつた。これ見よ此
處にもまた一首。調鷹巢も鼠の巢やら子を
置いて、あなあさましの親の逃さま。地鼠
とはよういうた御藏より下されし、御知行
盗みの米の罰。升落しにか、らうぞと、ッシ
笑ひとよめき通りけり。地聞くにつけても
北の方悲しとも口惜しとも。思ひ亂れてお
はせしが。なう房若。父御は弓馬を嗜みて
譽ある武士なれども。弓矢の冥加に盡き果
てかゝる不覺を取り給ふ。其の恥を顧てよ
も存らへてはおはすまじ。おされども預り
の御太刀は日本の名劍。奪ぬ出して惟茂卿
へ渡したう思へども。地家は閉門とぢめら
れ譜代の郎等小者まで。皆悔りて逃走る一
門一家は不通なり。男とては其許はつかり
三年たてば十歳ちやぞや。調命を懸け身を
碎き御太刀を取出し。父の恥を雪ぎ落書を
立て、笑はれた。地親御の面を脱いでたも。
早う大人にしたいなうと口説き給へば。調

ア、母様泣かしやんな。何の事其の御太刀
を取出して。笑うた奴等が首打切つてくれ
うぞ。母様おれは強者ぢや。地おれは樊噲
張良ぢやと裾引からけ駆出づる。抱止め
てヲ、出来した。さりながらなんほ心
が剛なりとも。門は釘付高い聲もかなはぬ
ぞ。思へば夫の帶刀殿子まで健氣に産付く
る。魂すわりし可取が其の夜に限つて後を
取り。諸萬人の口の端に。うたはれ給ふ。
シ恨めしさよ。地妻子の恥辱は思はずかと歎
き給へば房若も。悲しさうにつく。見て。
おりや樊噲ぢやといふ顔に。ッ戒をつくる
ぞ哀れなる。ヲ、道理いとほしや。せめて
御身に御慈悲下り。罪赦さるゝ爲なれば。
萬事家内を慎めと。親子一間に引籠り。い
つを晝とも夜もすがら。寝もせぬ夢に明さ
るるオクリ心の。内ぞ情はしき。地泊羅の潭
も水あせて沈みも果てす存らふる。帶刀太
郎廣房は心の外の誤りも。運の不祥に近江
の國伊吹山の片陰にスエテ知邊求めし隱家も

ノムラシ憂きには絶えぬ。身の成る果。地妻子
に一目對面し御太刀の所在を語り。兎にも
角にもならばやと。やつし果たる破れ眞身
をしる雨は厭はねど。月にも恥づる夜の笠。
梅が小路の我が宿の。門に入らんと立寄れ
ば。こは如何に。地逆茂木打つて釘付に戸締
めたり。帶刀はつと眼も眩み南無三寶。調
代々朝家の堅めとして。武勇の名を得し親
祖父の屍。地名字に釘を打たるゝかとスエテ
ヤ、涙ぐみ立ちたりしが。今は何をか期す
べき門前にて腹かき切り。腸つかんで扉に
打付け死なんものと。地どうと座を組み刀
をすばと抜きけるがいやく。我が心底を
知る人なく身の置處なきまゝに。狂ひ死に
死したりなんどいはれんは。一子房若が恥
辱。據なし。調妻子に所存を語るまで。地
暫し存ふ命とも。心を隔つる高塀の腰板に
刀を當て。我が家へ我が身として宛ら盜賊
の。所爲もけやけき標板。ッしめつきくと
切破る。地北の方障子を明け。調耳を澄し

てヤアさては盗人ごさんなれ。閉門の家女子童と侮るとも。地一討に切り留て房若に手柄させ。世上の聞えにせんものと。薙刀かい込み房若にそつときやけば。どつこいやらぬア、高いく合點か。ムムくうなづき押肌ぬぎ。地高からける足丈も九寸五分をすりと抜き。親子さし足息をつめ。フシそろりくと狙ひ寄せ。地待ちかくるとは白壁を一尺餘り切破り。身を細めて這入る形つらも頭も引包み。ちぎれし胸の菅菰に、只養虫の蠢く如く。フシ書院を指して忍び入る。地やり過して北の方。ハル薙刀取伸べ腰の番ひをはらりとなけば。うんとばかりにかつばと伏す。房若打物持てひらいて飛びかれば。やれ房若なつかしやと。地むつくと起きしをよくく見れば父の帯刀。ハア、くるとばかりに親子の人スエテ呆れて。詞もなかりけり。稍あつて帯刀。ヲ、思ひかけぬは道理々々。詞妻子の手にかゝりしは。せめても天の恵と知れ。

語るも面目なけれども。某不覺の名を取る事臆病に似て臆病ならず。彼の祝言の供先無二無三に切りかけしを。諸任が所爲と心得。只一筋に御太刀を大事にかけ。地前後を分かず落ちし程に物に誘はる心地にて。そことも知らぬ山々を二三日はさまよひしが。詞やうく夢の覺めたる如く。地始めて驚くフシかひもなし。地此の言譯は私事。五十歩を以て百歩を笑ふとかや。詞逃ぐるは同じ逃ぐるなり。帶刀太郎廣房が面搦拭うても出でられず。地自害せばやと幾度か柄に手をかけしが。日本無雙の寶の御太刀。朽果てん勿體なさ。浮世にまだくながらふる心底思ひやつてたべ。詞今は近江の國伊吹山の麓。久作といふ土民の家にかくまはれて目を送る。此の久作は御身も覺えあるべし。先年家に奉公し。澤といふ腰元と密通して駈落せし。九郎といひし童が事。地昔の恩を忘れもせぬ。夫婦が誠頼もしく御太刀を預け置く。サア詞片時も早く房若

を連行き。太刀を請取り惟茂に參らせ。始終打明し歎きなば仁心深き惟茂。品よろしく奏聞あり鷹巢の家を立て。地房若武門を繼がん事疑ひなし。此の事く詳しく知らせ置き心やすう腹切らんと。非人にやつし來りしに屋敷は釘付戸締められ。詞扉切破りし某を盗人と思ひ心はしかき薙刀。房若が働き天晴帶刀が妻子なるぞ。地嬉しや死後に案じもなし。やれ。詞夜明も近付く外へ漏れては説もなし。地止めを判いて一足りて玉の緒もフシ引入る。如く見えければ。地北の方涙に暮れ。御太刀さへあるからは御身の上は言譯立つ。如何に姿變ればとて。夫を見遠へ手にかけて。何とながらへあられうぞなう房若。父の敵は母なるぞ寄つて切れと泣き給へば。今はの眼をくわつと開き。詞ヤイウろたへ者。武士の廢つた夫を刺殺して。あの作世に立てうといふ性根はなく。共に死んで房若を誰が守立てて家は

繼ぐ。今の間に夜が明け御咎の堀は切破る。見苦しき此の態を御所の役人檢非違使どもに見付けられ。恥に恥を重ねるか房若連れてはや急げ。地詞を背かば生々世々妻でない夫でないと悶ゆれば。調ア、これこ

我世の中にあらん限りは只頼め。御誓願。あやまたす一つ速に導き給へ。南無阿彌陀佛と引起し止めをぐつとさしも草。伊吹山へと焦れ行く道たど。くし。三五入歌エイ。手枕々々肩だるござるに。一火

子を産むは金産むと同じ事。そなたの胎内は銀山ちや。おれも随分精出して。地ま一人二人掘出さうそちも手のもの炙して。山の腰暖めや久々まぶが途切れたに。ちと山入致さうか何と山はさからうがと。しなだれ寄ればしなだれて。うを恥かしい晝日中

地本劍狩

れ何の詞を背かうぞ。地房若おじやと出でんとすれど後髪。思ひ切り兼ね進み兼ね近江の國がどつちやら。伊吹山とはいづくぞと。口にくどく口説きと涙が足を引戻す。房若もうろくくと戸じめし門を押して

か飛脚文箱足に三里のたゆる間も。サンヤレくさんさつつけやれ。手杵かち杵。フシ氣輕な男の地氣もあさく連れ添へば。噂が心もザオオッ採拔艾。伊吹の里に昔より。刈れども盡きぬさせも草。フシ身過は草の種

女房の口からそれがまあ。えやは伊吹の艾屋が。女夫中よい暮しこそフシ所帯の藥艾なれ。地是じやらくらもよい加減。旅人家が大勢門に立つてぢや。地おつと合點と店先に進み出で。伊吹艾の機能を商ひ口にぞ

見て。爰が明かねば出られぬとステかこつけ泣くこそ哀れなれ。調エ、堀の破れが眼に見えぬか。愚鈍な餓鬼めと叱られて。地泣くく潜る四ツ。這是父親知らぬ犬子や。母も續いて出で給へばなうくこれく。

なりし。地夫婦曰ばたに息休め。調なう久作殿。此方一人は何してもゆるりつと過ぎかねぬ身を持つて。女房子ゆゑに漢方くづし憂苦勞。さりながらまあ四五年。あの萬虎が十二三になるまでぢや。持つて出た果報

し月に乾し。桑の杵は男を表し柳の白は女を表し陰陽和合に搗きぬく揉みぬく白艾。今年艾菴艾二十年から百年まで代物僅か六

調止めを刺いてくれぬか止めを刺せく。イヤもうそれは許して下されかし。なう曲もない苦痛させんといふ事か。夫婦のよしみ頼む。地くくと苦めば。思ひ定めて立歸り。刀押取り涙ながら日頃念する觀世音。

身代に氣をもんで煩らうて下さんなど。背中さすつて云ひければ。調ほんにあのよな

をを切艾。臍をふすべる薰臍艾霜にかじ

中さすつて云ひければ。調ほんにあのよな

をを切艾。臍をふすべる薰臍艾霜にかじ

をを切艾。臍をふすべる薰臍艾霜にかじ

けし老木の節の筋柔ぐる蒸艾。未だ稚き兒櫻はなの身柱や筋違や赤子にすゑても熱からず。智恵ない子には智を生じ子の無い女中は子を孕む。此の艾の威徳には時を選ばず日を嫌はず思ひ立つ日に人神なし。土用八專構ひなし前三後七慎みなし灸した夜でも戀衣夜着の下から手を入れて。せゝり起すにふつとりと捻艾の生やいと跡もうぐはず痛みなし。引灸焚灸柴りなし養生灸押灸醫師入らずの御重寶捨てると思つて只た六錢。巾着の皮切堪へれば年中の地後樂。フシ召して御座れと賣り立つる。地辯舌がらに上下の旅人オクリ皆いへへづとにと求めけり。フシ歩みほつれし。草鞋や。地房若は悄々とおしよほからけに破れ笠。店先に立ち休らひ手を伸して。艾の袋を引つつかめば萬虎がはしたなく。間あれ父様乞食が艾盗むぞや。地すりめやらぬと飛んで下り小腕捻上げ。調店の物かけて取る。道中の小童。地重ねて爰へうせうかと荒き風にも

當らぬ身を。握拳七ツ八ツうんといふほど敲かれて。涙はらくこほしながら痛いとだにも聲立てず。間いや盗みはせぬ母様の足痛い。歩かれぬとある故に。やいと貰ひに來たわいや。地堪へてくれと説はぬ。詞に素性顯れてフシ目も當てられぬ次第なり。地女房見兼ねいとしや參宮かなする人。お袋はどこにぞ草鞋が足をくうたか。艾欲しくば遣らうかといたはれば。地いやおきや。親をだしに遣ふは。物取の奥の手。ヤイ小童。今度は是を喰ふかと。地杆振上ぐれば旅人どもア、これ。爰は我々が扱ひ。嘘にも親とは奇特なり。こりや艾取らせんと一袋投出し。早う歸つてすゑてやれと皆々通れば房若。横柄らしく推戴き。痛さこらへて泣いた顔せまいとすれど泣じやくり。フシ笠傾けて立歸る。地門見廻して女房夫を招き。間今の子を含點か。なんほう汚れ破れても衣裳つきに見所あり。物云ひの大様さ目許口元帶刀様に生寫し。疑も

なく房若様とやらにまがひはない。地おとしや帶刀様今度の恥辱雪がれず。都へ歸つて切腹する妻子が是へ來るならば。御太刀を渡し再び家を繼がせてくれとの御頼み。其の御詞に違はま若君うろたへ給ふ體。帶刀様は御切腹に極つた。追付いて奥様もお供せうと斷出づる。間ア、これ待て。此の久作もさうは見たさりながら。此のひすい人心騙のあるまいものでもなし。殊に預り置いた寶の御太刀。彼の橘の諸任とやら望みをかけ。是から起つた騒動念にも念を入れたがよい。旦那の妻子に極れば艾の袋に隠れもない。久作尋ねて御出でなされう。總じて此の事隣限つて穩密。ざはざはして近所に不審立てられな。今朝からもうくと頭痛で頭が碎ける。地旅人はなし日は暮れると暖簾はづし看板仕舞ひ。見世片付けて。フシ部を下し。一寝入して汗してくれう。門口締めて用心しやと頭巾鉢巻高枕。間こりや萬虎。房若の帶刀のと必ず人

にいふまいぞ。眠たさうな目許ぢや抱いて
地寝ようと引寄せて。うん／＼うめいて引
被る木綿蒲團の裏表。背戸門締めて女業。
夜なべ取りつく行燈の。メテ光も細き忍び

聲。地久作は爰か都から来た明けてたもと。
表をひそかに敲く音應と答へて駈出づる。

蒲團の下から裾引つとらへ。米屋か味噌
屋か留守ぢやといへ。留守ぢや／＼と引
留むる。エイ物負うた覚えはないと振切つ

て門口の。ッシとしや遅しと走り出で。
なう奥様がおゆかしや。おいとしや最前此

の御子をそれとも存ぜず。慮外致せし勿體
なやとすがり付けば北の方。昔にも似ぬ此

の有様身の愛き時の人頼み。恥かしさよと
ばかりにて。ッシ涙に。くれて在します。地

お力ないは御尤されども大事の此若子様。
お氣ばししなせ給ふな折ふし夫は風心地。

先づ／＼是へといたはりて脱ぎすて草鞋洗
足の。床は寶の子の薬蕪や。洩りて袂に露

霜も。ッシ奥の間にこそ請じけれ。地これ久

作殿聞いてか。奥様親子御出でなされた。

ちよつとお前へ出られぬか。ヲ、聞いて
は居たがどうも頭が上らぬ。熱が強うて氣

が宙を飛ばぶやうな。随分御馳走／＼と云捨
て蒲團引かつく。地ア、時も時の煩ひやと

奥に出づれば北の方。なふ久作の病氣と
はさぞやそもじの氣扱ひ。高きもひくきも

女の習ひ。夫子上は我が身にも。かへて
心を痛むるぞや。是につけても帯刀殿そな

た夫婦の志。くれ／＼も悦びてあへなき最
期を遂げ給ふ。預け置かれし寶の御太刀此

の子に持たせ。惟茂卿へ参らせ父の家を繼
がせてたべ。世が世ならば御身邊に頼まる

るこそ道ならめ。却つて頼む身となりし。
あはれと思うてたもやとてメテさめ／＼と

泣き給へば。ア、眞加ない。來し方の御
厚恩。久作も云ひがひなき。商は致せども。

昔に變らぬ男氣。地夫婦が命をなけうつて
も御世に立て置かうか。地お屋形を出で

し時身に持った子も成人致し。房若様のよ

いお伽御世に御出でなされての。家老殿に

して下されませ。ア、おとなし様に。お眼
がかたいちとお休み遊ばせ。地何ぞお裾に

置きましよと。恥ぢぬ心の奥底を明けて伊
吹の山嵐。落ち来る軒の月更けて房若は、

らく／＼と。居睡りこけしあぢきな北の方
も旅疲れ。咄寝人の袖枕。前後も知ら

ず臥し給ふ。地悼はしや隙間の風も厭れし
に。夜寒を何と洗濯物恐れながらと打着せ

／＼。我が身は次の片隅に子のある中は男
にも。常が丸寝を今日は猶。ッシ帯引きしめ

てぞ臥しにける。ッシ既に燈火。半點し／＼
地三更に伴ふ鐘の聲。深夜の雲に埋れて。ッ

シ四方に人音鎮まりたり。地久作をつと起出
でそろり／＼とあたりを見廻し。奥を覗い

てさし足に雨戸の樞かけがねを。締めて廻
らす力帯女房が口に手を當て。鼻息窺ふ胡

椒の紛薬研罽の二尺一寸するりと抜き。奥
をさして入る處を起きて女房。膝節にしが

みつき振つても引いても放さばこそ。片足

飛に家の内を引摺廻れば附いて廻り戸棚

の隅にどうと引据ゑこれ。詞此の拔身は何

ぢや。熱氣に冒された體でもない。お主様

の寢所へ誰を切る刀ぞ。ヤイ噴ましい昔ほ

ね立てな。エ、仕立て後にいはうと思ひ

しに。こりや太宰大貳諸任公より内通あり

帯刀に預り置く平國の。寶の太刀持參する

に於ては。領分伊豫の國の内桑村郡三十町

を。永代扶持せられんとの契約。かう近道

に持つて來た仕合せ。此の刀で房若をして

やつて。今の間に黒縁の乗物に乗せるぞ。

老入の榮華まで此の頃思案しめ置いた。地

聲立てて目を覺すなだまれくと突つと立

つ。まづ待つて下されと引すゑて興醒顔。

スエテ溜息吐いて居たりしが。地や、ありて

涙をはらくと流し。詞情なやいつの間に

魂が入りかはつたぞ。お主様の御厚恩七年

は未だ昨日今日。よもや忘れはあるまい。

地二人が不義の忍び合ひあの萬虎がお腹に

宿り。身は重うなるといひお家の法度を肯

くといひ。親請人の迷惑子はおろさうかな

がさうか。二人首を縊うかと内立關の外絆

に。繩まで懸けたを覺えてか。地それに

お主の慈悲心奥様の合拳にて。お袖の下よ

り金戴き夫婦連てお家を走り。あの子を悦

び三人の命。生きながらへたは誰が庇ぞ。

わしや今日が日までお主の方へ足を向けて

も寝ぬわいの。互の性根見届けて言交した

ほどにもない。きたないさもしい心根や持

佛に御座る如來様。つい木の切れと思つて

かわしや何にも知らねども。地獄も此の世

にあるさうな報いがなうてかなはうか。女

房子可愛が定ならば分別しかへて下されと。

夫の膝にもたれ伏し。聲を立てじと我が袖

を。フシ口。くはへてしめ泣きにかこちく

どくぞ不便なる。詞エ、馬鹿律義な。仕替

へる分別こつちにない。地わごりよが分別

出直せと突立てば突放し。詞よいよくそつ

ちの分別極ればわしも思案極つたと。膳棚

の庖丁押取り我が子の萬虎引起し。胸元に

差當つれば。ヤレ女め氣狂め。詞恨があら

ば口でぬかせ。科もせぬ子に刃物を當て。

大事の子に怪我させたら堪忍せぬとねめつ

くる。地女房涙せきくれど。憎いながらも

夫の悪事。スエテ高聲もせず。かこち泣き。

詞なう科せぬ者は殺さぬとは。御身も見事

知つてか。我が子大事と思ふ程人の子は尙

大事。地殊に御恩のお主の子殺してそもや

其の報。我が子に當らであるものか此の子

が行末お主の罰。愛い辛い報い見せうより

一思ひに今殺す。皆御身の惡心からお主と

我が子を右左の。兩手で殺すと同じ事。これ。

庖丁と思つてか此方の心の劍ぞや。詞サア

房若様から殺しやるか此の子から殺さう

か。生きとし生ける身の上に命を大事とす

る故に。地熱い炙も堪忍する薬を商ふ魂に。

惡魔が入替つたか地獄の迎ひがゆかしい

か。慘い悲しい心やと聲を立てねば眼で恨

む。恨みは夫思ふは主人歎き一ツを二筋に。

零す涙は組糸を。フシ手繰り。出すが如

くなり。地久作はつと得心し。詞アツアさ
うちや過つた。お主は根本こんぽんこちとは枝葉えだは。
根さへ枯れねば枝葉は立つ。お主が本ぢや
合點したぞ女房ども。ムウ餘り急な折れや
う眞實まことの發起か。ハテ木石ぎせきならぬ久作。て
きめんの道理を聞いて合點せいでよい物
か。地未來まで助かる意見女房と思はぬ善
知識と。手を合すれば嬉しさの猶も涙にむ
せびしが。構へてく其の心を跡へ戻して
下さんな。詞さればく我が身ながら此の
心めが自由にならぬ。地少しも心に油斷さ
せず善は急げ明日早天都さうてんへお供し惟茂卿を
頼むべし。地御兩人の駕籠かご二挺。お太刀持
する人足今宵から約束せう。詞御身も休ん
で七つに出立の用意しや。それなら早う戻
つてや。ヲウ火の用心ようしやと門の戸明
けて跡を又。さすとは見えし片雄波かたをなみ。足も
音なく見がくれてフシ椽の下にぞ這入りけ
る。見るよりぞつと身も顛たふはれ扱もく恐
ろしや。詞得心も偽り。地斯かる邪見よけみの悪人

に。夫婦の枕を並べたる我も前世ぜんせいの因果の
業ごふ。破れかぶれ奥様に知らせ。いつそ割れ
て出ようか。イヤく年月としづか重ねし我が夫。
罪に落すも本意でなし。遣る方知らぬ我が
身やと。むせ返りくエテ伏沈しづむこそ無慚むしづ
なれ。地扱は簀子すのこの下から突殺さうといふ
巧み。エ、罰も報もかみわけぬ。愚痴とも
悪とも恐ろしやあさましや。兎角とがく我が子を
代りに立て我も死んで見せたらば。恥入つ
て悪を翻しお主の爲になるべしと。思ひ定
めて萬虎を寝ながらそつと抱き起せば。晝
の跑はなに草臥れてたはひ性根じやうこんも長欠伸。母に
じつと抱付くを抱きしめ。千年萬年と思へ
ども定まる業ごふは。フシ詮方なし。地房若様に
代つてそなたの命を母にたも。時には父様
の胸怒心も翻ひり。お主様へは御奉公未來で
は佛様に。褒めらるゝぞと身を添へて。フシ
せくり上げて歎きしが。地おそなはつては
詮なしとそつと立つて歩めども。疊も薄き
竹簀子たけすのこ下へ知られじ聞かせじと。火焰くわんの淵

の薄氷踏むかとはかりわなくく。ふる
ふ足をやうく鎖に鎖め。我が子を密みつと奥の
間の親子の側に寝させ置き。我が身は房若
抱取つてそろりくとわざり退く。跡の聲
を貫きて氷の切先突きぬき。く閃ひらいたり。
ひらりくと火に映うつひ。萬虎が耳の際枕元
ハア。く危なや。詞今迄は刃物持つな地
怪我すなと。世話やいたもの可愛氣に劍けんの
山に捨つるか。思へば目もくれ冷汗に、
シ心も。消ゆるばかりなり。地刀の切先萬虎
が脊骨せきこつに突き當て。胸板むねかけて貫かれ。ぎ
やつとばかりに反返さかへれば目も當てられず
身も縮み。知らずに殺す父親ちちと見て居て殺
す母親と。つれない親を持つた子やと。思
へば前後も打忘れ母はわつと叫ぶ聲。地北
の方驚き起き上つてなう悲しや。房若が殺
された久作なうと騒ぎ給へば。詞是々申し
其の久作が悪心からなす業ごふ。されども房若
様は恙つかなし。殺されたは我が子の萬虎。地
委しき仔細は申されず先づ奥様此のお子連

れ。早う愛を落ち給へ。ヲ、心得たと懐中の守刀房若に。さゝする間に女房戸棚の封捻切り。是此の袋は寶のお太刀是が大事故渡します。ヲ、地合點と太刀袋押取り出でんとする所へ。地椽の下より久作厄神の荒れたる如く飛んで出で。ヤア、罪人ども昔は昔今は今。主面ひろぐがふが悪い。面々の立身づく義理も仁義も入るものか。飼ひかふ犬に手を喰はれ女め故に子を殺した。其の上に此の太刀ぬつくりと渡さうかと飛蒐つて引つたくる。地女房すかさず掴みつき。申し奥様。此の太刀は此の女房が跡から持つて追付かう。辻まで退いて待たつしやれ。早うくと氣を急げば。心得たりと親子のヲシ人走つて表に出で給ふ。地夫婦太刀を引合ひ夫は片手。女は兩手太刀を下に引つする。久作ええ笑ひ。己れがよし千人力あればとてこりや。此の脇差で腕節を切落すが放さぬか。なう命捨てた此の女。腕切らるゝを厭はうか。八年九年

連添うて其の様な根性と。知らなんだが口惜しい。いとしい可愛い子を殺さば。邪見の角も折れうかと。地可愛や萬虎に無駄死させた悲しやな。大事の子を殺させて男でも何でもない。あつたら月日を其方の様なむごい恐ろしい。あさましい畜生と肌を觸れて腹が立つと。顔を見上げつ見下しつ。恨みて睨む目の中に、ヲシ涙の。海を溝へけり。エ、地あたやかましいと振上げて。右の腕を肩口よりばらりと切落す。左の手は猶放さず。これ異國の眉間尺とやら首を討たれて。劍の先喰切りふくんで本望を遂けしと聞く。地唐日本も同じ人女でこそあらうすれ。五體の内一寸でも續いた所に魂籠り。此の太刀は渡さぬといふより早く左の腕切落せば。飛付いて細付にしつかと喰付き。うなりうめいて引いたりけり。調ハア、徳利子は見たれども。徳利女房今見始め腕なしの振喋とは此の事。すしな女の酔徳利と突放して。細首水もたまらず

打落す。地首は太刀に喰付きながら兩眼くわつと舞上りコハリ夫を追立て追ひまはり太刀の鞘にて打立つる。音は千聲萬聲の砧をおくる夜嵐の空物凄き雲に入り。翼のあるが地如くにて、ヲシ虚空に。翔り失せにけり。地かくとも知らず親子の人待ちかねて立歸り。内を見れば女房の死體は朱に横たはる。南無三寶と目もくらみ呆れ果て、立ち給ふ。地久作も半狂亂。調ヤア愚人夏の蟲。己れら故に女房子をよう殺させた。地敵取らんと切りかくるもうかなはぬはまだと。房若は椽の下。北の方は門の口逃出づれば追ひ返し。走りの下籠の蔭夢に追はるる心地して。隠るゝに處なく納戸をさして逃入れば。地久作二人を見失ひ愛や。かしたこと尋ぬる足も。自業自縛の因果歴然おのれが刀に切裂きし。寶子の破れに兩足ぐつと踏込んだり。地獄落しと謂つべし抜かん。引かんと悶き寶垣の繩しまり。竹のそけにて脛の肉熊手に搔いて取る如く。苦しむ所

を下に隠れし房若。守刀取り直し。股も脚も
覺えたか／＼。覺えて己をようぶつた切つ
たり殺いだり突通され。調ヤレ／＼痛いは
／＼。餘りむごい地許してくれと泣叫ぶ。北

の方走り出で脇差もぎ取り。切つつ突いつの
恨の太刀。房若も顯れ出でてすた／＼に切
りさいなむなぶり殺しのたれ死。天の憎

しみ土人の罰。妻子の罰も一時に。フシ報い
の劔ぞ心地よき。地今は是迄これよりは頼
むは佛神天道次第。いさうれ房若いざ給へ

母上。親はそれたか鷹の子の心は鳥屋出の
大鷹。ツ。雁取り鶴取り白鳥取る。手
に取る小鷹手馴れ鷹。やがて名を取り知行

取り譽を取ると氣逸物。心ばかりは勇めど
も。身は落草に影隠す歸つて雉子と鷹巢や
郡の。古巢に歸りけり。

第四 信濃下り
今年。渡りの。伽羅では。ないが。と
めてねまきの。一襲。ねまきの。とめて。

とめてねまきの。フシ一かさね。共に重ねて

二襲いざや信濃の雪國の。雪の肌を温めて。
同じ契りを重ねんと。エテ世繼御前も玲瓏
も。心折れあふ。フシ花の枝。ハルシ杖に切
りつ。旅衣世の愛いつらい知らぬ身は。

後強しや後には。金剛兵衛茨孤次郎つはも
の二人連るゝとは。誰もなるまいまねて見
や。まねて都の町の中。フシオクリながら
人目。耻かすとハルシ笠傾けて。杖つき

の。乃の字や誰が手習に。ホラシいろはちり
ぬる粟田山。候べく候に見えたるは。オクリ
雪折。竹の影やらん薬屋の烟一筋を。白く

に讀みなして。エステ玉草つもる關寺に。歌
小町跡のなりふり残す。霜の小菊の狂咲々
々。嵐に狂ふ秋の空雲に。埋れて微なる。

三井の御寺は。フシあれとかや。彼の秀郷の。
中よしの龍宮海の乙姫の。人の侍背別れ路
は。長橋如何にせよとの鐘の聲つがも長良

の山續き梢まばらに染めなして。残んの月
の紋所。木の葉衣の模様よく。フシしやんと
立ちたる三上山。いつか比翼の床の山。裾

は。萩原小松原。待つと誰がいうたや。妻戸
をヤ明けて。月に枕。のヤ宿かした。ハルシ
シ宿柏木の。森ならで。粟津の森にやすら
ひてそれから。先を見渡せば。沖の鷗や磯
邊の千鳥。羽音淋しきさ。波聞けはさな
がら。フシ夜の雨。ハルシ誰がなかだちの。
文使。花にをりはへ行く雁も。爰の景色を
忘れ堅田に落ちかへり。飛びかふ翼ほのほ
のと。帆かけて走る。とも船も戀の道かや
舵を絶え。行方白羽の矢走に渡る。から櫓
の。ハツミ拍子が。からり。ころり。フシ唐衣。
打出の濱打出で。見れば往來の袖繁く。小
オクリ人や。見知らん見られじと。笠を反ら
せてよそめふる。ハルシ空には虹の。彩り
て花の柄付の。フシ鏡山。顔にほやく。秋の
日の。さして誰とて恥もせず。構ひはせね
ど旅馴れぬ身はとりなりも直さんとエステ亂
けし髪の柳蔭しばし。立寄り給ひしに。シテ
地足も竄れし旅人の七歳ばかりの幼いの。
手を引き歩み疲れしは母ぞと見えし萩原

木蔭にお休みなされしは。歌都人と見參ら
す。近頃粗相な事ながら。余吾將軍惟茂様
は御在京にてましますか。若し御存じも候
は、教へてたべとぞ尋ねける。ワキ調金剛兵
衛心付き。抑何故に尋ね給ふ。即ち我々は
惟茂の郎黨ども。あなたは何れも御簾中。

主君惟茂は公用ありて信州へ下向につき。
地只今いづれも下る折柄用事あらば同道せ
ん。誰人なるぞと問ひければ。シテさては
聞及びし方々にてましますか。我が夫は御
太刀故身を果し世をさりて。羽がひしをれ
し鷹の綜緒房若とは此の子が事。御情あれ
や人々よ。ワキ地さては聞及ぶ帶刀太郎の妻
や子か。いざ件はん痛はしや。シテ憐み給へ
諸共に。ニラス同じくしほる袖の露。ハルッ
シ野路の篠原。分け行けば番場ばんばに續く小野
の宿しゆく。なじめぬ中も問ひ問はれすれつ纏つ
ハ指針の峠遙とほに。見下せばフシ今こそ秋に。
近江路の。名所々々を其の儘に。梢にうつ
す寫繪と寫して人に語る迄。我が扇にも柏

原逢ふ夜の夢はいつ迄も。覺きて見ばや醒
が井の。水はせかれて淀むとも。我は止め
じ不破の關。スエテ旅行く人も立別れ。稻葉
の山や。宮路山草木も染めし麻衣の。木曾
の御坂にさしかかり信濃路。にこそ 三重へ
着き給ふ。

サシ面白や頃は長月二十日餘り。四方の梢
も色々に。錦いろどる夕時雨。濡れてや鹿
の獨り鳴く聲をしるべの狩衣。實に面白き
ナホスフシ景色かな。地花の吹雪の雪ならで拂
はぬ袖に積りては。五色の雪と降る紅葉。
フシ分けつゝ行けば錦着て。ハルフシ家に歸る
と。人や見ららんと。朱買臣が昔を詠みし。
フシ歌の心に似たるぞや。地それは唐土の
會稽山。ここは信州戸隠山。今惟茂が身に
たくへ望を叶へ二度都に歸るべき。しるし
を染めてますらをが。やたけ心の梓弓。
籬の矢さへ紅葉して。スエテ共に染羽と櫛の
葉の。帝の御日には。龍田川の秋の夕べ錦
とも御覽あり。波らば中や絶えなんと。惜

み給ひし。御製もあり。又は青苔の花
を踏んでは同じく惜む花紅葉。堪へず紅葉
青苔の地。踏までは行かん方もなしあら
く。面白やな。行くも紅葉葉戻るも
紅葉葉。心を染むるも。紅葉葉。もみぢ葉
の。フシ蔭に宿れば。雨にもあらず。雪にも
あらず。まして露霜霰にあらず。亂れて吹
下し袂にはらり烏帽子にはらり。はらり
くばらくばつと。風の寄せたる朽葉落
葉の色も珍し。調ハア、聞きしにまさつて
嶮しき山かな。谷深く。峰高く。屏風を立
てたる如くなるに。樞樞蔦紅葉。紅錦繡の
山黄纈の林。錦上に花を敷くとは斯様の
事をや申しつらん。ヤ是なる紅葉の下枝に
盃をかけ。鼎の下に落葉かき寄せ薪となし
て燂らせ。酒暖むる此の風情。林間に。地酒
を煖めて紅葉を焼くといふ。詩の心をうつ
せしは。詞詩人が歌人が扱は又。戀する人
の樂みか。花に鶯紅葉に鹿。昆布に山椒戀

に酒。ウタヒに酒は曲物更に得こそ堪え

ね。繪にかく鶴も酒に舞ひ、フシ葎を酒にも
換へしぞかし。地主は誰とも知らねども風
流人の爲すわざ。咎めはあらじ立寄つて酌
まう。か。詞ヤア向ふの紅葉の木蔭を見れ
ば。さもやごとなき上藤の紅葉に戯れ遊
覽ある。此の人々の酒なんめり。ウタヒ詞よ
し誰にもせよ上藤の。深山隠れの紅葉狩。
かたぐ推夢叶ふまじと、フシ道を隔て、山
蔭の。岩の崖路を、フシ過行けば。ワキ、け
になう虎溪を出でし賢人も。情は捨てぬ盃
をいかでか見捨て給はんと。いふ聲遠くいつ
の間に姿は爰に忍ぶ措。亂れをゆるす竹の
葉の。便りにフシ立寄り給へかし。シテ地、思
ひ寄らずや數ならぬ。深山にたてる木の下の
露華もならず御免あれ。ワキ、情知らずや一
樹の蔭。二河の流れを汲む酒も。縁あればとて
引留むる。シテ、引かる、袖も、ワキ、ひか
ふる我も、二人ウタヒ、さすが岩木にあらざれ
ば。心弱くも立踰る。所は山路の菊の酒何
かは苦しナホスかるべき。ワキハルシ、およそ

酒には。威徳あり。愁を掃ふ玉箒。詩をフ
シつる釣針思ふ事なく。折る事なし。殊更。
秋の葉の色。酌みかはす山水に。弓矢は何
の御爲ぞ思ひついたり此の山に。鬼棲むな
るといひなすを。誠と心得平けん爲な。地
おそろしやそれは人の空言。又は御身の空
耳かハルシそもや。鬼すむ。山ならば女を
助け入るべきか。まことや鬼の籠るは安達
が原の黒塚。葎生ひ茂れる宿の。うれたき
に。假にも鬼の。すだくなりとは。昔男の
こはざれに。女を鬼との捨詞。普天の下率
土の内、フシ何國か鬼のすみかならん。弓を
も矢をも打折りに。スエテ捨てさせ給へまれ
びとよ。シテア、ウ、暫く。左様の儀に
てはなむ。落來る鹿を射留めん爲の弓矢ざ
ふよ。ワキ、扱は御身は狩人か。シテ、狩
人ならねば射ぬものか。地、花踏みちらす鶯
をうたんといひし人もあり。猿丸太夫が悲
みし。色よき紅葉を踏散らす鹿射留めん爲
の弓ぞとよ。異國の楊柳は百歩に柳の葉を

垂れて。百矢を外さず空飛ぶ雁を射て落す。
ワキ、それは柳シテ、是は紅葉、ワキ、それは
雁金、シテ、是は小牡鹿。地名を聞くよりも
いで物見せん小牡鹿とて。服いたる沓を
ふんぬいで大口のそば高く。狩衣の袖をさ
つかたぬいで。紅葉の木蔭にねらひ寄つて。
よつびきひやうど射ばやと思へども。地、佛
の訓の殺生戒をば破るまじ。ウタヒ打ちと
けて酒を酌まうよ。ワキ、おもしろや劉伯
倫がもてあそび。今爰に、フシ酌めやくめ。
シテ地、晋の七賢が樂み、重ねて爰に酌めや
くめ。シテ地、是なる山水の巖にかゝる瀧の
み。瀧の白糸くるりくと。山もめぐるや
フシ雲もくるくる。めぐる盃數も忘る、我が

身を忘れて酔心地。正言歌おもしろいよの
木の葉の色よりお顔の紅葉。紅葉焚かうよ
り柴召さんか。沈や麝香は持たねども。
匂うて來るは燻物。大原木。大原木。、
買はいく、黒木召さんか。峠の茶屋で。

團子ばし買ふな。松の木肌をそろりと撫で

か

て。其の手で團子を。まろまかすく。眞圓まるく丸やのかもじが眞圓けな顔で。月見よとおしやる。角やのかもじは眞四角な顔で。炬燵にあたる。長い豇豆が花は短うて短い栗の。花の長さよ鼻の長い小天狗。しこのばいこのけぢく。爰を明けさい明けすば戻る。佩いたる太刀に露がうく。くくわんこや。くく。したんにたつほ、エイ。はらくにはらはらは。きりくくしつちよんく。ちやうりやうふりやうらりつろ。とらいらりやらりつろ、ちやうらにひよ。二人よろりくくとよろほひ臥したる枕の上に。雷火亂れて天地もコハリ響き。酒も鼎も焙となつて梢に騒ぐ山おろし。咸陽宮の烟の中に。ワキ不思議や今迄ありつる女。地とりく化生の鬼形と變じ悪なり帷茂。大内にて我が眷屬を矢先にかけし其の恨。微塵になさんと躍りかゝるを太刀抜きそばめ。二人コハリ切拂へども事ともせず。頭を擱んで上らんとす。引下し

て突かんとす。シテ山谷一度に鳴動して雲霧暗きナホス其の中に。月ともなく星ともなく一團の野火現れ出で。黄金の太刀一振紅葉の枝に懸ると見えしが。此の太刀自ら拔出でて。鬼神の上にはためき渡りトル三重閃きか、つて追散し追拂ふ劍の光。紅葉八葉御鉢の刃先。刃の劍相威力に恐れて飛行を失ひ。二人コハリ朝日に霜と消え行く鬼神。劍は鞘に納る山風。梢に其の儘残りし太刀の飾の金玉。紅葉の照葉も耀き渡つて。ナホス山路の草木赫耀たり。シテ地帷茂茫然としてあらあさましや我ながら。無明の酒の酔心現ともなき變化の形。顯著なりける利劍の徳と。梢を見ればありつる太刀のましますぞや。天の授くる名劍ならん嬉しや取らんと立寄れば。ナシテウタヒ詞へなうく其の太刀な取り給ひそ。それには山緒の候ぞや。ワキ扱はおことは此の太刀の主なるか。シテ否此の女が身に添ひ果つる物ならねど。タタキ我が身は軽き水の泡。

浮むは重き水鳥の。お主の爲と憂き世を踏み。心を碎き苦しむる。一ツの望ある太刀を。人手に渡し参らせば。思ふお主の出世の日を。いつかは三保の松原に天の羽衣盗まれし。彼の天人の憂き思ひ羽なき鳥の如くにて。天上せんにも羽衣なし。地に又住めば下界なり。兎やせん角やハルツせん方も。スエテ涙の露の玉蔓。かざしの花もしをくくと。三途に迷ふと。ヲシ傳へ聞く。其の天人の五衰より人間に八苦あり。ましてや女は五障の雲。三従の霧深きに。従ふべき夫に離れ。いと悲しと育てつる子を失ひし蘆邊の鶴。善惡二ツに迷ひぬる。來世の闇を如何せん。と。ノルヲ只さめ。くくとぞ泣居たるワキ地。似けなき賤の女の身心得難き詞の末。扱は一ツの望とは。價が欲しいといふ事な。我こそ隠れもなき余吾將軍平帷茂。價は望に任すべし。シテうたての事な宣ひそ。數多の命に代へし太刀。たとへ千金萬金も命に價のあるべきか。望とは陰

たのむ。譜代のお主の身の上と。ッシいひ
さしてこそ歎きけれ。ワッ猶も不審は晴
れやらす我も太刀を尋ぬる身。おことが
主人の氏名乗妻や子の身の上。詳しく語れ
と宜へば。シテハ問はれて斯くと語るにもい
と。お上の櫛紅葉。色に出すもつゝ、ましく。
別きてそれとは伊吹山。遂に麻の夫婦の中。
あたり近き。ッシ不破の關。地人目の關を
渡り越しとは。互ひの忍逢。狂ひ合うた
る唐猫の。お主の膝元懐しく。御恩をいつ
か送らんと身こそ貧しき暮しにも。心を直
に。シ世を渡る。地竹の子は猶親まさり薦
が産んだる鷹の羽の。羽交の下に立返り奉
公させん大人になれとたつ年月もたぐり來
る。歌三ツで髪置き五ツ袴着。六ツで寺入
り上げる手本の數々は。ヒッいろはの年弱
七ツ。撫でつさすりつ撫子の花の笑顔の。
愛らしき父と。説母とが樂みは。吉野
初瀬の花見にも。カン劣るまいぞや優るぞ
や。劣るまじきと育て上げ志賀の。唐崎一

ツ松ハムラシ外にならびも。なかりしに。地籠
愛餘つて我が夫の主人の子を刺殺し。我が
子の木の榮華にせんと惡心巧む恨めしや。
地因果々々の同い年。この手柏の二面。一葉
を分けて身代りに立つを夢にも白刃の刃
果敢や親の手にかゝり胸の邊りを。刺通し
刺通さるれば氣も魂も。消えんとなりは
てし其の佛の身に添ひて永き闇路に。ッシ迷
ひしなり。地かゝる歎きに沈みしも哀れお
主を世に立てて。罪を作りし夫の後世非業
の死のみどり子も。母が修羅をもち助からん
願の絲は一筋と。ステ玉を貫く涙の露。ワキ
見ればしをる。惟茂卿。シテハ山の紅葉も
一入に。ニスラシ。歎きの色をや添へぬらん。
ワキ地。心弱くてかなはじといかに女。お
ことが歎きも不便ながら。惟茂が尋ぬる太
刀は望をかくる人多し。何者が奪取り何者
の手に渡りしやらん。其の主の名を聞か
は望かなはんやうもなし。地太刀を改め事
を糺し奏聞して得さすべし。都へ尋ね來れ

劍の本 地

やと太刀を取つてぞ出で給ふ。シテ走りか
かつて太刀もき取り小脇にかい込み。詞な
う心強やつれなや。譽ある主君ならば大出
上げて名乗らんもの。不覺を取りしお主の
名何面目に名乗れとや。地圍に植ゑても紅
の色にもそれと知召せ。願ひかなはぬ其
の中は此の太刀我が身は放さぬとよ。ワキ詞
へけに。是も道理なり。さて日本には名
劍多し。此の太刀の銘。太刀の威徳。聞及び
ても知りつらめ語れ聞かんと仰せける。シテ詞
へされば主君の物語。御太刀の御本地聞傳
へし趣を。あら。語り申すべし。

先づ葦原大日本。神代三振の寶劍あり。
一ツは天のはざりとも。又は十握の劍とも
申し。大和の國石上の御神體に立ち給ふ。
又一振は八雲起つ。八岐の大蛇が尾先より
顯れし天の叢雲の寶劍。素盞雄尊祇園の牛
頭天王の。フシ御劍なり。地今一振は素盞雄
尊の御子。日吉山王權現とも。三輪の明神

とも拜まれ給ふ。地人代己尊の御劍。事

も悪かやこれ。此の御太刀にてましますなり。二人をそれより代々の帝に傳りて。

人皇十五代の輕帝。神功皇后神風や天照太神宮の告によつて。新羅の夷を、ヲ討つべしと。御身もさすがたゞならぬ子も日月の

中空に。ハルヲシ韓國として攻め入り給へば。中臣のいかつの臣。吉備の鴨別兩大将。兵

船軍船凡そ二萬八千艘。順風に帆を上げて。さながら悠々平地を行く。扱皇后の御座船

は。櫓箒弓鏑。鋒鏑兜腹巻を飾立て。ノ、錦を疊んで包み立つたる屋形には欄の纒。

綾の帆を上げ絹傘御傘清々。と樟が原の波間より。住吉の神社を取り。龍女は干満の

珠を捧げ。鯨鯢龍車を先として。八尋の鱈や鱈鉾や。鯛に鱈に鱈。あらゆる魚族

鱈を並べ。君が御舟を守護しつゝ。コハリ三日三夜は三つ羽の征矢飛ぶ鳥よりも猶はや

く。七千餘里を漕渡り百濟國の大港。ふうとうの津にぞ御船着く。百濟王傳へ聞き。

小國なれども日本の神軍。士卒の力を勵ますべしと金城。鐵壁。四百餘箇所に掻き並べ石礮石臺山の如く。鉾先揃へ矢先を磨いて待ちかゝる。ワキ日本勢は事ともせず

船を洲崎に乗捨て。シテ乗捨て。ワキ乗捨て。二人乗放し駒の手綱をかくつて。鞍越す波を乗りすかし。向ふ波を三頭に下り。

一鞭くれてさつくと乗放し。ヲ乗浮め。向ふの岸に上るもあり。又は遠矢に射て落す。矢先は降る雨降る霰。喚き叫んで戦ひ

しは。百獸の洞の中虎の駆けるに異ならず。敵も味方も入亂れ。切つ切られつ追つまくつ。鎧の袖を、汗に浸してやれ。さて。

さてくくく。ホ、くくく。暫時の隙もなっかりけり。されば日本神力の。住吉現じ給へば。八百萬神七千餘社。簇の手に顯れ出で。神明鎬矢射かけ給へば。此

の太刀白と抜け出でて。ひらりひらり切立てく。トル三三三。三十餘ケ度の。戰に味方は討たれず手も負はず。くくく。くくく。

新羅百濟高麗國の。荒き市を此處に追つ詰め彼處に追ひ。追つ詰め。ノ、攻滅して。歸る波風安くと。正八幡を。シ産ハ給ふ

母こそ三國和合して。龍宮城より嫁君娶り高麗の伶人舞樂を奏し。吳絨。逆絨の人の織物きたりん輪子。金襴緞子を織り弘

め。詩書禮樂の。シ道廣き。聖の書も渡り來し。上に惠の政事萬民徳に潤ひて。風雨

同時に治まる事此の御太刀の威徳ぞとて。太平國の文字によつて平國の。ヲシ御劍と。申し奉る。ワキ。けに有難やこれぞ我が尋ぬる太刀。望を叶へ得さすべし。頼む主君の名乗は如何に。シテ。今は何をか包むべき侍所の。帶刀太郎廣房。主君の若君房若殿籠に佇みおはします。地今爰に誘ふべし世に立て。たべ惟茂卿。止八幡も照覽あれ此の契約は違ふまじ。嬉しや有難や。今は迷の霧はれて。悟に入れや戸隱山。山風。谷風。二入。さ。さ。さつとして。木の葉隠れをよ

く見れば形は、秋の露さきえ。きえとて顔おんほ梢さかに莞爾わんじつたり。シテ地へ、房若親子二人の姫。二人の郎黨誘ひて誰が呼子鳥よこどりをことなく。分け入り給へば惟茂卿。互に始終の物語。

キ地へ房若が父帯刀は勅勘の者なれば。奏

聞經人も事むつかし。惟茂が家臣として過分の所領を安堵せん。地元服加へ名を改め。鷹巢たかのすの小太郎おとげ廣文ひろぶんと名乗るべしと御説あり。地はつと頭かぶを地に着けて悦の色淺からぬシテ地へ、女が首は嬉しげに笑を含みし梢の色。紅葉も同じ形見ぞと、請けたる袖の廣文が、ウシ末頼もし、頼みあり。ハムラシ此

の御太刀の。御威光に金剛兵衛が金剛力。茨菰次郎が仁王力。戸隠山の大明神天の岩戸を天の原。取つて投けたる手力雄其の大力加つて。鬼神怒ら亡び失せ八洲の外に波もなく。のゝめき渡る雲井の空へ。やがて再び。歸洛せん南無や戸隠大明神。早く瑞相見せしめ給へと一心に御祈誓あるさてこそ。廣文成長して。頼光に奉り。酒吞童子

を退治ある。源平兩家の寶の太刀上古も今も末代も。例すくなき御神力と紅葉を。幣とぞ奉る。

第五

地賢者を得たる渭水の狩にたへは畏れ紅葉狩。寶劍を求めしも自らの徳によつてなり。太宰の大貳諸任。思ひ立つ旨ありて戸隠山に勢子せこを入れ。我が身は山の半腹にシ敷皮敷かせ休らひける。地勢子の大勢駈來り晝前より只今まで。野鼠一疋出で申さ

猪猿しじ兎は存じも寄らず。野鼠一疋出で申さず。辨當食べた手前もあり。いかゞはせんとぞ申しける。諸任打笑ひテ、サ其の筈其の筈。知る通り當山には鬼神すんで人間をさへ取喰ふ。兎狸を生けて置かうか某山狩とは偽り。汝等に斯くといは、腰を抜して一人も。供するも者あるまじと思ひ山狩とは觸れたれども。地誠は鬼神退治なりといふより勢子ども顛かぶひ出し。後を見ては前へ出で、フシ前へくと込出でける。圓掬う

たる臆病者。某数年願ひをかけし。平國の御太刀惟茂拜領し。戀焦れたる世繼御前まで彼に下され。片落の御沙汰と思へども。上へ恨も申されず。地其の上に此の山鬼神

退治の勅説。何もかも彼に仕負けては諸人に面も合されず。鬼神退治とあるからは扮装もあるべきに。納め過ぎた惟茂が素襖長袖長袴で。毎日山を廻ると聞く。地諸任が下ごゝる鬼は附けたり惟茂退治の合點。サア侍から足輕中間奉公とは此の度。命を主に

にくれたと思ひ。惟茂と引つ組んで刺違へ。此の無念を晴させよ、フシ頼むくといひければ。地勢子の者ども猶顛かぶひ鬼とはいへど日に見ぬ事。第一好かぬは惟茂。其の上に金剛兵衛茨菰次郎なういや。鬼に鐵棒惟茂に牡丹餅。再々手並食べつた。ハア、悲しや。俄に虫喰齒が痛んで来た。お暇申し上げますと、フシ一人逃けて立ちければ。持病の中風が起つたと口を歪めて起つもあり。當月老母産月のヤ。今日は我等が叔父

桓武天皇の命日の。南無三跡の養寶屋の。

錢忘れた道つて來う。且那寺の長老が駈落

しられた。船頭が屋根から落ちた馬子が川

へ陥つた。何のかのとかこつけに皆々、フシ

外し逃けにけり。地郎黨桶邊の平藏立上り

ヤレ臆病者。一足でも立去らば一々首を討

つべきと呼はつても聞入れず。則あれ御

覽候へ残らず落失せ主従二人。鬼すむ山に

安閑として手柄にならず。誤つては御駈辱。

籠へ一先づお下りあれかしと云へば。ヲ、

我もさは思へども。最前籠にて金剛兵衛と

茨菰次郎がちりりつと見えたれば。此の

道下るは無用心奥山は又鬼の氣遣ひ。今で

は惟茂と兩方に敵が殖ゑて來た。どうぞ脇

道はあるまいかと。ウツヒ夕日も年も傾きて。

又七十餘りの柴人の。腰も捻れし山道を。

たゞほく／＼歩み來る。則こりやこり

や老爺。何と此の山に脇道はないか。鬼が

すむとはいへども。定めて劫經た熊か猪か

を。鬼といひなすものならん有様にいへと

ありければ。さて／＼疑深いお侍必す油断

なさるゝな。或時は女ともなり或時は小ほ

けな小坊主で出る事もあり。時によつて腹

衣に頭陀袋道心香とももれる。彼の世話に

申す鬼に衣といふ事は。此の山から起つ

たけなフシ御用。心とぞ答へける。地さす

がの諸任聞く度にびく／＼して。サア／＼

どうぞ氣遣ない道があらば教へてくれ。則

サアそこが變化の通力。今日來た道は明日

は無く。昨日まで無い大石が夜の間にぬつ

と出來るやら。大木が生え出で山人を迷は

すやら。道とて更に定まらず、怖いこと

／＼。さりながら忝い余吾將軍惟茂様。鬼

神退治なさるゝ由國中の悦び。是を妬んで

極の諸任とやら。惟茂様を狙ふとの風説。

此の諸任めを見付次第。打殺いてのけつと

國中の若い者。地手ぐすね引いて待ちかけ

ると。いはせも果てず胸倉挿んでどうと投

けヤイ爺め。則うぬは惟茂に何ぞ賣うたな

あ。此の諸任を見知つて。氣遣させて笑は

ん爲の偽。まこと鬼のすむ山に己れは何と

て柴を刈る。但しうぬは鬼の一門か。有様

いはずば踏殺すとはつたと呪んで責めつく

る。ム、いかさま御不審御尤鬼神に横道な

しとて。當山戸隠大明神の氏子の分は指も

さゝず。却つて守護致す故。氏子に怒うあ

たれば眼の前に仇をなす。總じて氏子に限

らず山を住家の山人。地柴でも木でも肩に

置いて通れば。夜でも晝でもフシ恐れなし

とぞ語りける。主従顔を見合せこりやかす

もあらう事。則ヤイ爺め。此の柴身がかた

ける。汝は道の案内先へ立つて行せをれ

と。柴取つてかたぐれば。エイお前がおか

たけなさるゝかア、是は御大儀な。慮外な

がらお先へ参りますと。文編地標路に肩を休

めたる。年の功とて山人が。鬼に取られし

荷ひ癩癩をさして。三風下りける。地房若

は只一人長刀の一本ざし。股引軽き山傳ひ

母上追ひかけなう房若。則いふ事聞かずに

どこへ行く姫君達のお伽はせず。大人衆と

同じ様に山へ登つて何をする。地戻らぬか
房若と引きとめ給へばこれ母様。詞なげ房
若とおつしやる。わしが名は小太郎廣文も
う大人ぢや。鬼神退治のお供して。鬼の子
でも殺さねば父の恥が雪がれぬ。地やつて

下され母様と踏みしまれば母上も。詞ヲ、
健氣な事よういうた。地父御を無事で置き
まして今の詞を聞かせたい。悦び給はん
ものをとて。スエテ又嬉しきも涙なり。諸任
は坂中にて茨菰次郎に追立てられ。案とも
わかす逃上り。草にや隠れん土にや入らん
とつろたゆる。小太郎は味方と心得是なう
くと呼びかぐる。諸任見付け南無三寶。
はや鬼が現れたと。ッシ地に喰ひついでぞ伏
し居たる。親子の人も興さまし。詞ア、こ
れ龜相な。其方はそも誰人ぞ。こちらは鬼で
はないわいの。顔上げて念を入れ是よう
見やと笑ひ給へば。イヤ念入れて見るに及
びませぬ。ある時は小坊主或時は女とお化
けなさる。由。お噂とつくと承る。一時に

二種は御念入るほど迷惑。鬼神退治致すは
平の惟茂。我等は結句其の。地ッシ惟茂を破
す橘の諸任。お恨受けん覚えなし助け給へ
と頼ひける。親子目配せ音に聞く諸任。父
の流浪も彼奴ゆる久作一家が減じし遺恨。

鬼より大事の敵ぞと。心賢しき小太郎大音
上げ。詞ヤイ。おのれを橘の諸任とは
我が通力で知つて居る。惟茂殺すは己れを
頼まず。鬼一口に嚙んでやる。どうでも攻
が太刀刀の差しやう。此の鬼どもを退治す
る面つきぢや。地待つて居れ。がりくと
嚙んでくれよ。疑はしくば眞の姿をあらは
そか。わんくくといひければ。詞ア、
く。胸愆な事御意なされな。退治する氣微
塵もなし。太刀刀がきづかひならばこれ。
地御覽あれと大小からりと投出す。親子押
取りするりく。抜放し恐かなり諸任。誠は
我こそ帯刀太郎廣房が一子房若丸。惟茂將
軍の家臣となり。元服して鷹巢の小太郎廣
文。地父の恨み世の敵眼の前主君に敵する

奴。餘すまじきと兩方より打つてかゝれば。
諸任猪の怒りをなし。ひらりと外しひらり
と抜け。かい潜つて北の方を小脇に搦込み
太刀もぎ取り。寄せな俸め一討と。八方拂
ふ切先に左右無くも寄りつかず。母は悲し
み聲を上げ。我を捨ててはや逃げよ。大事
の身ぢやとあこがる。危がりける最際中。

を剛兵衛茨菰次郎。敵の郎等桶邊半藏を引
包み。打立て。来りしがやれ出来いた小
太郎。しつばと討て小太郎と力を付けて拜
み打ち。胸は。ッ二人の太刀。平藏が首
より十文字にぞ切割たり。諸任ははと見
返る間に小太郎際さすつと入り。た。み
かけ。太刀打落し。眞俯向にた。き伏
せ乗つか。つて。詞ヤイ。こなりや今ぢや
くと。胸板を。扶くりくりり首打落し
ア。好い氣味ぢやと笑ひしは天晴武功の
親ぞんと。ッ母は悦び限りなし。地兩人悦
び御手柄く。鬼の首同然の功名いよく
君の御仕合。籠へ下つて一先づ御覽に入れ

られよ。母御の満足こそよくといひければ。されば御推量なされませ。あの親程な諸任を、鬼になつて騙した地言ひ廻しの辯舌。後には人も賣りましたよと、オウッ笑うて、打連れ下りけり。金剛茨菰息をつき。さて何でもない奴に餘程の骨折つたり。肝心の鬼に逢うた時くたびれては詮もなし。暫く休息せまいかと。十抱餘の板の古根横たはつて、蒸せり。ヤア屈竟の休み所と兩人あけ足腰打懸け。心揃ひし不敵者。鬼神退治は事とせす世間咄懸咄。是に酒があつてはと。紅葉を眺め悠々と、フシ氣をのぼしてぞ休みける。不思議や虚空の聲の中白挽く如き嘖れ聲。何者なれば推參な。足を伸してまどろむ所膝の上でやかましい。蹴散して退けうすやつと呼ばはる聲。地版上げ見れば一丈ばかりの鬼の面。角は桐木頭は茅。眼の光は鏡鏡をフシ打つて付けたる如くなり。二人太刀に手をかけ下を見ればこは如何に。地木の根と見えしは鬼の騙。朱塗の岩とも謂ひつべくさすがの者どもはつとせしが。ヤア不行儀な鬼殿。

人の前に騙を伸して見苦し。地足が長うて苦にならば切りこまけて取らせんと。切付けんとする處を乗せながらぬつと上げ。おうと呻く跳ね足に。百間ばかり蹴散して消すが。フシ如くに失せにけり。金剛兵衛すつくと立ち。これ茨菰。さぞや鬼が心には我々を蹴散したと思ふらめ。我々は又鬼の騙を下敷にしたからは。勝負は五分々々。サア是からは鬼にも人にも氣が出来て面白い。奥山深く切人らんいざ来いといふ處へ。刺下野郎の小奴が。だいなしの据りけりまで。歌調股から富士山見え申す。關内角内可内よ。取つたかたらんか虎藏よ。奴々小奴に。山の手やつこくくゑ。關内角内可内よ。とつたか

こくちよこ。さつても振つたりまだ振れく。踊る所を飛びかゝり。討たんとすればひらりと飛び。斬らんとすればはつと消え。陽炎稻妻水の月。眼に遮つて手に取られず。シあきれ。果てて立つたりし二人の頭を兩手につかみ。騙は空に引上ぐる。切つても突いても只雲水を切る如く。踏みしめても大象に引かるゝ如く。覺えず宙に引上げらるれば。天地俄に震動して、山河も裂くる如くなり。聞くとひとしく惟茂將軍山上に斬上り。南無や八幡大菩薩と。心に念じ彼の平國の御劍を抜て切拂ひ給へば、二人を大地にかつばと投げ。劍に恐れて雲井に上るを。引下し刺通し切伏せ給へば。地其の丈一丈の鬼神の正體。忽ち惡鬼を滅し給ひ。威勢日に増し所領も増して。二人の姫に數々の子孫繁昌。國繁昌民繁昌五穀豐饒の大日本神と。君との惠ある御代に。住むこそ樂しけれ。

牙又

心

實者得之便求將之全善^ク也^ク得^テ也^ク

自樹^ノ也^ト至^リ善^ク矣^ク然^レ後^ニ亦^モ善^ク也^ク

世^ノ善^ク多^ク也^ト世^ノ後^ニ亦^モ善^ク也^ク以^テ之^ト爲^ス也^ク

好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト

世^ノ善^ク也^ト世^ノ善^ク也^ト世^ノ善^ク也^ト世^ノ善^ク也^ト

好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト好^ク多^ク也^ト